

古史傳

自第百九四段
至第百九八段

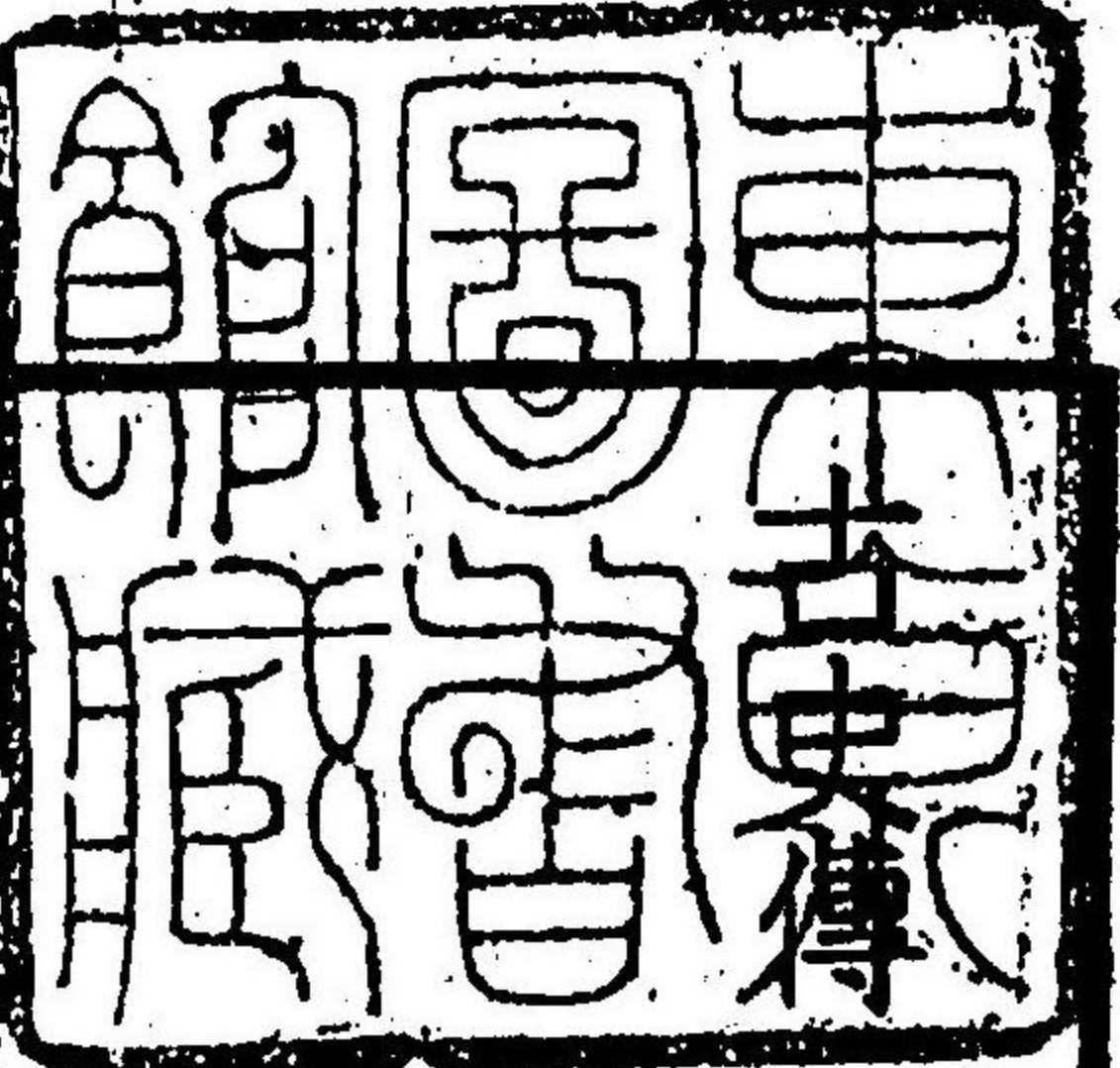
九四

東 京 圖 書 館			
一七	一八	二八	類
冊	號	架	類
			和書門

1

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

Blank page with faint markings.



二十四出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤

續攷

神代下四出卷

百九十四

爾大因主神鎮坐出時神魯岐

神魯美命詔天穗日命曰汝天

穗日命者天皇命出。手長出大

御世。堅石常石奉伊波比而伊

賀志出御世。令幸奉仰賜矣。此

者出雲因造出。統二仕奉杵築

宮而。為神禮自利臣禮自於天

皇命。獻御禱出神寶而奏神賀

吉詞出縁也。

此段ハ。出雲因造神賀詞を採て記せるあと。徴ふ云々

如し。あゝの傳よ。本詞と云るハ。○爾大因主神鎮坐之時

とは。前段杵築宮ふ鎮坐する時を云。○神魯岐神魯美命詔

を。天照大御神の御心を承て高皇產靈神皇產靈神の詔

諭し給ふあは。○天皇命。天皇と書くを常あるふ。かくれ

如く。命字を添て書奉れることを。本詞よ二處あは。古事記

ふもあは。続日本紀の一、卷三、卷あどの三字を。須賣良美

許登と訓べし。儀制令。義解よ。須明樂美御徳。師云。此假名

示さむ料ハ書れとる物と見えて、好字ハのかぎりを聚ツ絶
とる布ハどふ御字ハあど清濁さ牙叶ハをば、此字ハよ因リて許ス
濁依ハを非ハあり、れ布ハ此假字ハ。日本紀竟宴歌ハ、數女良美己
の事ハ、馭戎慨言ハよいへり。日本紀竟宴歌ハ、數女良美己
度ハあどハのハ。羅ハ機ハ流ハとも、竟宴哥ハふとハ終リ、須賣ハとも、須賣ハ
良ハをも、須賣良藝ハをハめ申奉れハ。須賣良朕ハを御自ハを詔ハ牙
巴ハ。師云、天皇字を當奉ハ巴ハし、いと上代ハの事と見え
とハり、若ハ、仁徳天皇あどの御世ハ、和迹ハあど、此如ハき博
士の申定奉ハし、ふや有ハむ、ちるを漢圀ハ、孔丘ハの春秋ハ、加の
王を、天王と書ハる、れど、本ハおきて、皇ハよ、天字を、冠ハへ奉
巴ハる、あるべし、彼、固ハりて、も、遙ハ、此後ハ、唐、高宗ハが、時ハ、天
皇と云号を、新ハ、小立と、誦ハ、あ、と、有ハ、し、う、ども、末と、ら、ざり
しを、あ、吾、須賣良等ハ、此、御号ハ、ぞ、眞ハ、の理、ふ、か、れ、ひ、て、
天地ハの、か、ぎ、り、豎ハ、よ、も、横ハ、よ、も、往ハ、通ハ、り、足ハ、は、し、て、動ハ、く、こ、と、
あ、く、變ハ、る、あ、と、あ、き、大言義須賣良ハ、皇美麻命ハの須賣ハを
御号ハよ、を、あ、巴ハ、れ、依ハ、。言義須賣良ハ、皇美麻命ハの須賣ハを
同、統ハの義ハ。故書等ハふ、あ、ら、ぎ、良ハは、添ハ、め、と、る、言ハよ、て、世

を統御スあ、る、ふ、尊ニ此義ハあ、巴ハ。美許登ハといふ義ハを、既ハよ、注ハ、巴ハ。

第五段の、は、て、此の天皇命ハ、忍穗耳命ハを、詔ハひ、て、次ハく、御
傳見ハべし、。代ハ、此天皇ハは、で、ふ、延ハ及ハべり、。○手長ハ之、大御世ハ。本詞ハ、

三處ハよ、の、巴ハ。祈年祭詞ハよ、皇御孫命ハ、御世乎ハ。手長御世登ハ、堅

石爾常石爾云ハ、神嘗祭詞ハよ、御壽乎ハ。手長乃御壽止ハ、如湯

津磐村云ハ、形ハぞ、の、巴ハ。師説ハよ、手ハ足ハの意ハり、万葉二ハよ、大

王乃御壽者ハ、長久天足有ハと、の、巴ハ。此ハ、從ハふ、は、し、岡部翁説ハ、
言ハあり、と、の、ま、ち、て、大御世ハを、專ハと、大御齒ハを、詔ハ牙ハあ、ら、ぐ、御

世ハよ、も、係ハて、詔ハへ、り、そ、は、本詞ハよ、此文ハ、此下ハよ、獻物ハ乃、白王

赤玉青玉ハよ、準ハ牙ハ。祝白ハ詞ハよ、白玉能大御白髮坐ハ、赤王

能。御阿加良毘坐。青玉能。水江玉乃行相爾。明御神登。大八
嶋因所知食。大皇命能。手長大御世乎。御横刀廣爾。誅堅米
とほるを思ふばし。大八嶋因所知食といふ。御世を所
知食あまむ。手長大御世乎。堅米と云ふは。御齡を堅むと。
祝白せ依言あ依をや。上引る神嘗祭詞よ。手長乃御
寿止如湯津磐村と云ふも。磐ふ比
へて。堅きを祝へる元より。五百津石村の茂く多
紀ふ。御壽の數重あり給ふを祝ふと聞ゆ。故岡部翁も
壽をイノチと訓れとま。
どヨとは訓るぬ也。○堅石常石は。加伎波。邇登伎波
邇を訓べし。例多紀詞ぬり。岡部翁説ふ。加伎波を。堅き石
比多と伊の省かひあるあ也。師云。加多を切絶ても加と
ある。伊を伎の韻よあれむ。
省くあを元と正ぬり。雄畧天皇紀。登伎波。ハ常石。比許伊
よ。堅磐此云。柯陀之波。ともあ也。

此切也。伎あまむ。登伎波といへ也。と有ぐ如し。即常ふ常
磐と書り。
万葉六。人皆乃壽毛吾毛三吉野乃多吉能床磐乃常有
沿鴨とほ也。床を借
字あり。三。常磐成石室五。等伎波奈周迦
久斯母何母等十一。常石有命哉あど詠と也。篤胤古き
祝詞宣命
あぎよ。此言の多う依を。取あらば考ふるよ。いと古く
え。堅石ふ常石よと云也。し。稍後よ。常石ふ堅石ふを
反さまよ云へり。そは。大凡その詞也。○伊波比奉は。祈年
成れる時世を。思ひ通して。辨ふべし。○伊波比奉は。祈年
祭。祝詞ふも。皇御孫命。御世乎。手長御世登。堅磐爾常磐爾
齋比奉とほ也。祝字忌字あぎを。もかく訓て。岡部翁説の
如く。伊波布を伊牟と。本同言よ。諸の凶惡事。汗穢事あ
どを忌避て。萬を慎むを云あめ。故多く神よ仕奉る事ふ

言_レ也。師も岡部翁の説よ從て後世よハ忌字をむ伊牟と
齋を毛能伊美とも訓を以て同言れることを知べし。ま
と後世ハ伊波布と云て、壽事_レをいひ伊牟を云ふ。多_ク嫌
惡_クて去_レこをのみ云て反對ある如くよあれども
壽を云も其人其物を吉_クら志_ルと願ふ_ルあてて凶
惡事_ヲ嫌_テ去_レて慎_ム意_ヲより轉_リ又_ク嫌_テ去_レる伊牟と云
も凶惡事を嫌_テ去_レよ_ト轉_レれる_ルあて本_ハ一_ノ意_{アリ}せ言_ハま
也。神武天皇紀_ヲ勅_シ道_臣命_ヲ今_以高_皇產_靈尊_ヲ朕_親作_顯齋_也
用_汝爲_齋主_云くと_ある_注よ。顯齋此_云于_圖詩_怡破_毘ま
あ_神代_紀。齋_主神_號齋_之大_人と_ある_注よ。齋_此云_伊幡
毘_と見_え。万_葉七_ふ。三_幣帛_取神_之祝_我鎮_齋杉_原十四_了。
爾_布奈_未爾_和家_世乎_夜里_氏伊_波布_許能_戸乎_あど_猶多
し。此_を天_皇命_此御_壽也。移_レ變_ルよ_を忌_避て。石_の如

く。堅く常しへお祝ひ白せと詔ふれ也。猶伊波布といひ
伊牟といふ言の本ハ考_ある_也。下_よ註_べし。第百三十一段
ハ_をイ_マを_云り_其也。○伊賀志之御世伊加志_を祈_年
祭_詞ふ。八_束穗_能伊_加志_穗ま_と茂_御世_春日_祭詞_ふ伊_加
志_夜久_波敷_能如_久あ_ぞ見_え。夜久波敷ハ弥木榮ありと岡部翁の説ありされど武
藏_因辺_ふて_木根_よ弥_生よ_木の_茂る_を弥_子舒_明天_皇紀_と
い_ふを_思へ_む弥_子生_るても_ある_べし。
ふ。嚴_示此_云伊_箇之_保虚_とあ_る注_よ。皇_極天_皇紀_ヲ大_御名_を
天_豐財_重日_足姫_天皇_をあ_る注_よ。重_日此_云伊_柯比_と
あ_る也。然_れむ_此言_ハ。嚴_重盛_茂あ_どの_字を_以て。心_得べ_き
が_如あ_まま_ぞ言_ハ本_は壯_了多_たこ_を茂_云る_言あ_らが_壯

小多紀也。嚴重茂あぜ此字の意もある故也。其方小も轉して伊加志矛を嚴重を書き伊加志穂を茂穂とを書と
す。今世の俗言よ物の多あるまゝ大あるれどを伊
加志とも伊加伎事れども云をやがて此言の存
あり。ちて此れ伊加志は御壽を多く重ぬる義なり。其を皇
極天皇の御名を重日足姫尊と申せ候も。日を多小重祗
足はし給ふ義小通ぬるあを神功皇后此御名多息長足
比賣命と申せ候也。思合せて辨ふべし。○令幸奉ハ本書
小佐伎波閉奉登とあ也。前ハ奉祀のレよ可字を
當よりしうと今改め也。岡部
翁云。前小大國主神小勅牙依御言小。汝の祭を主む者也。
天穗日命と詔ひし也。大國主神を拜祭也。う於皇美麻命

此御世をも遠長小祈奉し給へむの御心あ也。是
ふて知られ也。○仰賜矣岡部翁説小仰を命小同じ。師
云。よを負せと。もを同言よて。其事を負持しむは義あり。
此言をばて其意あ也。○此者云く。是時かく負せ賜へる
事あも。天穗日命の御末。出雲國造の統く。杵築宮小仕奉
也。云くはる事本ふて。それ仕奉る世く此趣ハ。上り既
小註せ也。第八十三段。○神禮自利臣禮自岡部翁説よ。禮
自利ハ。遣唐使此時の奉幣祝詞小。禮代乃幣帛といひ。續
日本紀也。伊勢大神宮小奉り給ふ御詞よも。禮代乃大幣
とあ也。其外よも見也。章夜ハ敬ひま茂事あ也。代ハそ

此奉る物實あす。崇神天皇紀よ。物案此、云望能呂志とあり。それを自利と云む。
流志のあぐまり理ふて。禮の斯流志といふ言あす。はと
禮自と云て。理を省るゆえ。唱ふる調れ爲あゆまじ。自と
濁るを言。せ有が如し。はて神禮自利を云ゆえ。熊野杵築
便あり。二宮の大神を始矣。出雲國造れ仕奉る神等也。天皇を祝
給ふ禮代多し。臣禮自利と云ゆ。己國造の禮代多し云
るあす。そハ出雲氏ハ臣の尸あまむれり。本詞より。そハ本
みぢうら出雲臣と白せるを思ふべし。詞よ。天皇命乃大御世乎。手長能大御世止齋止爲氏云々。
加夫呂伎熊野大神。櫛御氣野命。國作坐志大穴持命乎始。
天百八十六社坐皇神等乎。志都宮爾靜奉里氏云々とま

お云ひて。あを甚く文を畧きて引とれ末ハ此段よ採れ
ば委くハ本詞を披見るべし。
は。神魯岐神魯美命の穗日命よ宣子は御言を記し。佐伎
波閉奉登仰賜志次乃隨爾供齋仕奉氏神乃禮自利。臣能
禮自登御禱乃神寶獻良久登奏とあるふて著明し。師説
乃礼自利ハ穗日命より始矣。次ハの出雲氏也。○御禱
神とちの献る礼代あすと云れしを委うらば。
之神寶。禱を富藝と訓べし。言義ハ第百三十一段はて此
ふ註ふを見るべし。
獻物此品くは臨時祭式よ。玉六十八枚。赤水精八枚。白水
精十六枚。青石玉
四十枚。金銀装横刀一口。長二尺六寸五分。鏡一面。徑七寸八分。倭文二端。
長各一丈四尺。廣二尺二寸。并置椗。白眼鷄毛馬一疋。白鶴二翼。乘軒御贄五十
昇。昇別盛とあり。○神賀吉詞ハ。師言此如く。迦牟本岐乃

余ヨ基登コトと訓べし。万葉二十ふ。餘其騰と見え。續日本紀ふ。
 此詞を神賀事カムヨゴト神賀辭カムヨゴト神齋賀事カムヨゴト神吉事カムヨゴトふと書れ。臨時祭
 式ヨシは。神壽詞カムヨゴトと書れとり。此吉詞を。大御前オホミマヘふ奏ウラせ依式
 也。臨時祭式ヨシふ見えあるを。師の此詞コト後釋ノチよ引ヒキて。委マカく
 辨ワカられぬまマバ。今更イマよ云イハべ。彼カ後ノチ釈ノチ此書コトを披ヒちて本書コトふ。
 此を伊波比乃返事イハヒノヘシ能神賀ノミカゲ吉詞ヨシコトといひ。天津次能天津次能神賀ノミカゲ吉
 詞ヨシコトとも云イハふは。穗日命ホヒノミコトふ。神魯岐神魯美命カムルキノミコトの仰オホシせ給タマひし
 御命ミコトは。ほほよ。穗日命ホヒノミコトとト始ハジ始メて。次ツギくクふ絶ツツせセび仕奉シタマふ
 故ユ。天津次能天津次能といひ。天皇命オホミマヘは。大御齡オホミヨシを。堅石ツツよ常石ツツふ
 伊波比奉イハヒノミカゲ也。伊加志御齡イカシノミコトふ幸マカへ奉タマれと。神魯岐神魯美命カムルキノミコト

此仰オホシせ給タマふる御言ミコトノコト違チガへマ。天皇命オホミマヘの大御前オホミマヘふ奏ウラは。八ヤチ即ツキ
 天津神天津神ふ返事ヘシ白シラひ義ヨシふまマむ。伊波比乃返事イハヒノヘシ能ノミカゲといイハふ。
 最モトも感カンとト死シ吉ヨシ詞コトぬヌ也ヤ。此コト壽詞ユシコトは。比ヒ類ルイあアく。等ナく感カンと
 もモうウ予ヨはハ。称ナらラまマれレ也ヤ。今更イマれレまマどド猶ナいイはハ。考カウへヘ洩シさサまマとトるル事コトもモをヲ注ツクしシ出デ依ヨ因ユ了リヤウ加カくクぬヌ也ヤ。

五九百

於是水戸神出孫櫛八玉神爲

膳夫而獻天御饗出時禱白而

櫛八玉神化鵜入海底而咋出

底出波。邇而作天。八十平瓮而。

鎌海布柄。作燧白。以海蓴柄作。

燧杵而鑽。出火而白云。是我所。

燧火者。於高天原者。神皇產靈。

御祖命出。登陀流天。出新巢出。

凝烟出。迄八拳垂燒。舉地下者。

於底津石根燒。凝而拷繩出。千。

尋繩打延。爲釣海人出。口大出。

尾翼鱸。佐和佐和邇。控依騰而。

折竹出。登遠遠。登遠遠邇。將獻。

天出眞魚咋白矣。

アメノ、マ、ナ、グロ、マヲシキ

於是ハ。上件大國主神の杵築宮小鎮、坐る時を受けて云、

○水戸神也。伊邪那岐大神也。禊祓し給子依時。吹生給

子。伊豆能賣神也。比古比賣二柱小分、給ふ時の御名

を。速秋津日子。速秋津比賣神と申して。此者水戸神也と

有。委く在第二十五段第二十。○孫也。師云。和名抄。爾

雅云。子之子。爲孫。和名無方古。一云比古とある中。比古

と云ぞ正し。孫字古くハ皆然訓。ま。曾孫を比く古

を云も。比古の子と云。意あまむれぬ。今俗よ曾孫字比古

と云。比く古の訛

ま。年。万。年。米。と云。例。よ。て。本。を。宇。万。古。あり。そ。を。蕃。息。子。ふ。て。子。等。の。又。子。等。比。お。ぎ。く。う。蕃。息。れ。さ。て。此。の。孫。を。比。く。古。の。意。比。稱。あり。是。も。古。也。稱。と。ハ。ま。き。あ。り。さ。て。此。の。孫。を。比。く。古。く。子。孫。乃。意。ふ。云。る。う。ぎ。も。見。ゆ。れ。ど。も。猶。子。比。子。を。云。あ

依べし。○櫛八玉神。名義櫛ハ奇ふて。例の稱名ハ八玉彌王

は魂ふて。八魂ハ八心と云。を同く。御魂也。彌足ひ坐る

由ある法し。其を禱白して。鵜化。云くして。かく稱辭

竟と依趣あどを思ふも。御魂の彌足ひ坐る神と聞ゆ

れむ。師云。太玉の玉と同く。太國主神。御饗を

其の第六十一段。大玉命。比下見。るべし。け。て。此。神。の。名。

他の古書小見と依あ。とれし。師云。或説。此神を沫那藝

のとしそそ水戸神因河海持別而生神名沫那藝神云とあるを此水戸神之孫とあるとを思合せての推當ある。○膳夫之師云加志波傳を訓む日本紀ふも多し。繼體天皇紀了ハ供膳とも有也。和名抄大膳職於保加之乃加也波天乃宦主膳監美古乃美名義ハ先いと上代小夜乃加之波天乃豆加佐とあり。故饌の加志波と云也。今云其加志波の事ハ應神天皇卷大御酒柏此下注せるを見べし。故饌の事を執行ふ人を加志波傳と云也。傳ハ手あり。凡て物を造る人哉手人ぞいひ。今世ふも事を行ふ人を某手と云類お布し。出雲風土記抄よ神門郡武志村ハ膳夫大明神と云あるを此神ありと云へり。○爲而ハ天照大御神皇產靈大神此詔命以て任し給ふ也。

巴。那理氏と訓ときを櫛八玉神みぢ。○天御饗ハ師云天。上ふて行ふ御饗の式を用ひらば。故云ある也。神武天皇段。天皇段と云。天皇段と云。大御饗とあれど。天は大の誤らとも見ゆ。まども下ふ天之眞魚咋をも見え。大嘗祭祝詞。天都御食をぬあれ。けて此。獻大御饗之時と云也。總を括して。先言置て。次小其細ある件くをば云あり。是文此一格あり。次よ禱白而と云と也。獻天之眞魚咋也云は。即此御饗の件く也。中昔の物語文あと。○禱白而。言此意ハ。上此石屋戸段。天兒屋根命。太祝詞言禱白而。せある處。既ふ注せめ。但し此。彼とはいけり。異ふ。志て。鵜よ化る事を祈願白せ。遂れ也。其を何ある神よ。禱

白せるうと云ふ。此神ハ水戸神の孫ふしあれむ。其由を

以て。其祖神とちよ禱れる事依べし。師を此を御饗奉る祝詞よて其詞ハ下

文よ。是我所燧火者云とある是あり。然る不禱白と云ことを彼処よ云ひして。此処よ先云るを御饗奉る時を云ふ接連む為あり。櫛八玉神化鵜云の事よ係てハ見

言ふを怪み思ふ人も有べけれ。櫛八玉神。師云再び

此名を擧るハ。上を詔命ふて任し賜ふをいひ。此を其任

を奉はりて。是と下下の種々此事を。此神の行ふ由よ云

ふ也。○鵜師云。和名抄ふ。辨色立成云。大曰鵜。日本紀私

利。豆止小曰鵜。爾雅注云。鵜。水鳥也。鵲頭如鈎。好食魚者也。見也。志万豆止利と宇をを大小よ分るとるハ。非

鳥鵜と云ハ一あり。まと宇を俗云と云るもいっよぞや

宇てふ名既よ神武天皇御世の哥よも見えと依まや

字鏡ふを鵜をも宇とあり。古事記よ此鳥三處

に。ちて今此鳥化ハ勝れて水底よ善潜入依もの依

故あり。此を海底よ入ことを鵜よ依とハ云れせ

心れり。化字此。○海底ハ。万葉小。和多能曾許。あるよ據

て訓考し。○底火師云。上よ既海底と云て。はと如此云

は。拙き小似とまども。海底と云ハ。海水中方を。延

く大方よ云言。此底ハ正しく底を云あり。○波邇ハ。師云。

和名抄ふ。釋名云。土黄而細密曰埴。和名波爾。字鏡ふ。埴黏

土也。波爾とあり。万葉よハ。赤土黄土おども書。此土を陶

器の類を作る土あり。故此を作る人を土師と云。神代紀より須佐

之男命の以埴作舟。けて今海底の埴多しも求めしは。何

れ意ふり知がとし。若そ人氣遠く。清潔處れを擇ばるる。

出雲風土記抄秋鹿郡出嶋社下より云西濱佐田村金代大神也此社を金代と云ハ傳云昔此社の海中より古製の金錡出たる故 ○八十平瓮。八十は數れ多き哉云平瓮ハありと云り。

古事記よ。八十毘良迦と書とまど。神武天皇紀よ平瓮と

あるふ據れ也。古事記よ。毘良迦を書る毘を師説了。和名

抄よ。唐韻云。盆。瓦器也。辨色立成云。盆比良加。俗云保止岐。

と何也。盆と瓮をハ同字よて。今云皿鉢の類。字鏡よを。毘

はと鏡を比良加と何也。毘ハ字書よ見えぬ。まど鏡ハ盆の類と聞ゆれむ。比良加は

か。けて此器ハ。今此皿まど土器あど此如き物と聞えと

也。但し儀式よ。比良加徑一尺三寸。濺一尺四寸と見え。大

嘗祭式よ。比良加一百口各受一斗。あざもあまむ大

あるも有。名義比良ハ。平瓮と書る如く。濺うらび平ある

れ。形をいふ。式よ多加須伎比良須伎と云器も見え。まど今

日本紀よ。浅甕とあり。俗言よ。器此浅きを佐良伎と云。迦

は。此類の器ハ總名を聞えて。由加。大嘗祭式よ。凡應供神

物と見え。まど由加十口あど。多志良加。式よ見。甄あどあ

も見也。忌筥の義あるべし。多志良加。式よ見。甄あどあ

也。何也。食物をも器をある。氣とも云り。其を万葉二

盛あど。神武天皇卷。崇神天皇卷。垂仁天皇卷あどふも神

祭此具。此物あり。猶其處くふも注を見べし。○海布ハ
師云米と訓べし。和名抄よ。海藻。木米俗用。滑海藻。阿良
女俗用。末滑海藻。加知米俗用。昆布。比呂米。一名衣比須女
おと見えて。米は總名あり。万葉十四。伊蘓乃和可米十
六。角嶋之迫門乃稚海藻者人之共荒有少可杼吾共者
和海藻とよめり。古一首の哥よかく字を替て書れむ
和海藻此方む二ギメと訓べきあり。
和名抄よむ。爾木米と阿良米とを出して。別よ和加米と
云をむ出さば。ほと名も和加米を爾岐米をむ。一の如く
思はるまとも。延喜式よ。海藻。稚海藻。滑海藻。ま。和布海
藻。荒布と二を竝べて擧ぐる所くあれば別あり。斯て式

此和布を海藻と分てまむ。和加米ぬるよ。和名抄よむ。海
藻を俗よ。和布を書よし。ゆる以思子む。總ては爾岐米
と云ふ。其中よ。細よ柔よ。ゆを分て。別よ和加米とも云
ふ。ゆよや。今云下總圀の海辺ぬる所くを周遊する時よ。
所のも此ども此海草ま種く川出して干置と
るを見とるよ。昆布此みえ無ししうと滑海藻。海藻。稚藻
もありて。逐一の名を問ふよ。皆師の考此如くふぞ有る
る。其中よ海藻をバ。あふ米。はて比呂米を昆布。阿良米
とも字音よ海藻とも云ふり。を荒布。和加米を和布を書ゆあむ。合せて思へむ。此
海布と書るを。總名と聞ゆまむ。あむ米と訓ほくて。何ま
の米をも定免難き中よ。稚海藻。滑海藻。あむの米よ。海藻
此字をひて。はと万葉七。は海藻。刈舟と書まば。今本よ
モ。カリ。

ブネと訓る。海藻ハ。米の總名あるふ。此字をほと爾岐米
を誤る也。 海藻ハ。米の總名あるふ。此字をほと爾岐米
ふ用あるを思ふば。種く此米の中よ。爾岐米を主とひる
よや。然らば此の海布も強ていはく。爾岐米を定むばき
の。然れども。海布とあまむ。と。米にて有。然らば。上云
云。下総。國の海辺にて。ある。米を。海藻とも云物也。
其生。味。ふ。よ。い。け。う。甘。き。故。よ。所。の。子。等。の
食。ま。欲。が。物。あり。其。を。瘠。の。虫。此。蒸。と。ある。由。ふ。て。親。も
少。く。免。び。け。て。此。が。幹。ハ。いと。太。く。て。大。丸。は。人。此。腕。の
太。さ。も。有。べ。し。これ。干。固。まり。て。は。比。類。あ。く。堅。き。物。あり
故。よ。その。柔。ある。や。と。よ。鎌。或。ハ。錐。あ。ど。を。小。口。よ。さ。して
干。り。と。免。柄。と。ひ。る。由。その。所。此。者。の。云。し。此。ふ。由。有。り
あり。此。を。吾。も。試。し。見。て。後。ふ。ま。と。も。云。べ。し。所。よ。り。て
ハ。此。海。藻。を。細。よ。き。ざ。み。水。も。て。久。し。く。煮。ま。し。海。苔。を。煮
る。如。く。と。く。る。を。滓。を。去。て。盆。あ。ど。よ。け。ま。し。お。く。よ。大
疑。菜。あ。ど。の。如。く。固。ま。は。あ。正。其。を。味。嗜。ふ。漬。 ○柄。を。師。云。
あ。ど。して。飯。此。菜。よ。和。て。食。ひ。も。嗜。る。物。あり。 ○柄。を。師。云。

莖を云。和名抄ふ。幹。和名加良と有是也。 幹。字。注。ふ。艸。木。
柄。字。を。示。此。類。或。を。斧。柄。の。柄。此。を。よ。て。意。異。あ。ま。と
ぬ。其。を。も。同。く。加。良。と。云。故。よ。通。は。し。て。書。ゆ。れ。り。 物。の。柄。
艸。木。の。莖。字。云。も。加。良。て。ふ。名。を。本。一。あ。る。べ。し。漢。國。よ。て
も。柯。字。ハ。木。枝。此。大。ある。を。も。云。ま。と。斧。柄。字。も。云。て。通。へ
る。こ。と。あり。 ○出。雲。風。土。記。よ。出。雲。郡。腦。鳥。 ○鎌。ハ。師。云。加
理。氏。と。訓。は。し。 芥。あ。正。鎌。字。よ。芥。意。を。無。ま。と。も。體。の。名。を
其。用。よ。用。ひ。あ。は。こ。と。帚。掃。字。を。書。る。是。用。を。以。て。其。體
ふ。用。ひ。あ。る。と。相。似。と。正。是。ら。古。の。文。字。用。此。一。格。あ。正。ハ
む。う。し。 ○海。蓴。ハ。師。云。古。毛。と。訓。べ。し。和。名。抄。海。菜。類。よ。漢
語。抄。云。石。蓴。古。毛。辨。色。立。成。云。海。蓴。和。名。同。上。と。あ。正。此。漢

語抄の石菘と辨色立成の海尊と。一物よて海小生る物
と見也。水草の菘を別あり。○今云猶あり。和名抄
此非を論ハれとる説どもあまど。今を洩し於大
嘗祭式よ。紀伊国所獻云く都志毛古毛各六籠云く。竝令
加多カダ潛女シメノメ十人量程採備とほは古毛も是あるべし。けて
此海尊と云物。いふある物ふり未考得也。谷川氏云海草
あり。小藻の意あるべし。保陀波良よ似て。丸き物多く於
ル巴と云り。其よやされど海尊の字を當とるを思へ。巴
海よ生て藁ふ似とる物あるべくや。まゑ燧杵よ作れ
るを思へ。や。堅き物ハ依るし。猶よく尋ねばし。○
燧白を肥伎理宇須燧杵は肥伎理岐泥と訓べし。和名抄
各宇須杵岐
祿とあり。師云。かく海草ハ莖どもを以て。火を鑽る具
せせしと。如何ある由う知らば。此物をも以火を取

はあとのりや。海邊の人ハ廣く尋ねばし。或人云く。海邊
て。されとる木を火口用ること。海邊のちて其を白杵
里よありや云り。此ら少しハ由ある事。○鑽出火は師説よ。肥伎
としも云は由ハ。次よ云はし。○鑽出火は師説よ。肥伎
理伊傳氏と訓べし。和名抄ハ。火鑽和名比岐利燧和名比
宇知とあり。凡て火を出る。打と切也の異ハ。倭建命
段よ。以其火打而打出火とほは是打火にて。尋常ハ如し
はと上代よ。忌て清くはる火を。皆鑽出はとよて。火
打をを用ひ。或火切を用ふ。是。いふある故より。其意を知
陽火金より出るを陰火ハ。故あり。ハ
と云。例の取は。足らぬ漢意ハ。今よ至はまでも。
大神宮比御饌炊く火ハ。どは然あり。故。伊勢国。了てを
必しも切。出さばと

以別ハ忌忌清清火火と云ふあり。月輪兼實公玉葉小神宮少習不用。
火打火用用火切火ぞ見え多多也。伎留伎と云ハハ輾磨輾磨と本本同言同言あり。
記記ハハ鑽鑽岐里岐里又又母美母美と云云ハハ古古よりよりももむむととぬぬ云云。
ししありあり。雖雖もも穴穴をを穿穿をを俗俗ハハ伎理伎理毛美毛美と云云。雖雖もも云云ふふ名名。
毛毛牟牟也也。云云はは是是もも同言同言なりなり。けけてて右右ハハ和名抄和名抄まま日本日本。
紀紀の倭建命倭建命段段ハハ以以燧燧出出火火ととあるある。ああどどふふ依依ままババ。燧燧ハハ火火。
打打おおははふふ。此此ハハ燧燧白白燧燧杵杵のの燧燧也也。肥肥伎理伎理とと訓訓をを如何如何と思思。
ふふ人人有有べべルルままどど。燧燧ハハ火火打打もも火火切切もも通通ははしし用用ふふ法法。
きき字字ありあり和名抄和名抄ハハ鑽鑽をを比比岐利岐利燧燧をを比比字字知知とと分分ととははるる。
やや、後後のの事事おおぞぞ有有ハハ法法。そそハハ燧燧字字注注ハハ取取火火具具也也とと云云。礼礼。
註註ハハ金金燧燧取取火火於於日日木木燧燧鑽鑽火火也也とと云云。木木燧燧よよててハハ火火をを打打出出ししべきべき由由ありありままどどここまま火火切切ありありことこと明明ららしし。

けけてて火火をを切切出出法法ををまま於於燧燧字字をを所所以以穿穿也也とともも。穿器也穿器也。
とともも注注せせ法法とと。雖雖字字のの注注ハハ穿器穿器少少銳者銳者似似鑽鑽而而小小也也とと云云。法法。
也也をを合合せてて思思ふふ。漢漢固固よよててハハ鑽鑽をを錐錐のの如如くくハハ銳銳ららしし。
ととぬぬ。穴穴穿穿法法器器此此名名ありあり也也。然然るるふふははとと鑽鑽燧燧也也とと云云。とともも。
古古ハハ漢籍漢籍ハハ見え見えととるる。燧燧思思ふふ火火を取取ふふもも。加加ハハ鑽鑽也也とと云云。
器器ハハ似似ととるる物物をを以以てて穴穴をを穿穿るるがが如如くくハハ碾碾也也。搥搥てて出出せせ。
しし事事とと見え見え多多也也。謂謂ゆるゆる燧燧是是ありあり。必必ししもも金金ハハ限限ららばば。けけ。
てて今今此此ハハ燧燧白白燧燧杵杵とといいははるる。其其ハハ思思合合ははままばば御固御固よよてて。
もも火火をを切切るるはは。然然爲爲ししおおをを知知らられれ多多也也。狀狀ハハ火火切切をを以以てて碾碾りり搥搥るる。
るる故故ハハ白白杵杵ととハハ云云ふふありありべべしし。今今もも大大神宮神宮忌忌火火屋屋殿殿のの。
てて神神供供をを炊炊くく火火也也。皆皆切切火火ありあり。其其法法ををととくく枯枯ととるる。檜檜のの。

木口を切りその木口の中央より出さしくおみをつけてま
と錐の柄此如くある木を以て力を入きてかの木口を
おとくもみて火を出はる右の杵を檜の大嘗祭式ふ
ても又を山枇杷といふ木よても作とあり
次火燧一荷。納宮二合。吳竹。為足。せ見え。此を悠紀主基兩
より大嘗宮へ運ぶ。ほと火燧三枚。是を阿波國より造備
行列の中よ見也。はと火燧三枚。此は神服を織る物の中よ
見。まゑ火燧三枚。已上料。鐵二廷。具の中よ見也。此を御饌
あどを炊く料の火を切具よ非る故。はと伴造燧火兼
鐵を以造るふや委くハ知がとし。はと伴造燧火兼
炊御飯。安曇宿禰吹火。あぞも見也。内山眞龍が出雲風土
比多伎山名。鵜火。燒山。りて。櫛八玉。神此事を云。御屋也。と
何る。其御火。燒屋。ありと云。り。○記傳。追次。此考。ふ。云。く。
出雲國造。義孝。弘安。記。よ。自天照大神。至。意。宇。足。奴。命。神。
相繼。十八代也。第十九代宮。向。宿禰。少時。自。賜。出。雲。姓。以。神。
至。義。孝。子。く。相。承。二。十八代也。雖。然。鑽。神。火。飲。神。水。未。混。流。
俗。云。く。と。何。る。よ。し。大。社。の。説。あり。自。天。照。大。神。と。云。る。ハ

心得。天。自。天。糖。日。命。と。何。る。滋。き。あ。と。あり。さて。因。造
世。く。神。火。相。続。と。て。第一。大。事。と。今。世。至。依。ま。て。も
因。造。新。よ。世。を。嗣。む。を。び。る。時。を。ま。お。意。宇。郡。あ。る。大。庭。社。
う。ゆ。き。て。神。火。神。水。を。受。続。く。式。あり。そ。を。神。代。の。火。切。白。
火。切。杵。と。云。て。天。照。大。神。より。天。糖。日。命。よ。授。け。賜。ひ。し。と
を。因。造。家。よ。代。々。第一。の。神。室。と。して。傳。來。よ。る。宝。物。あ。る
よ。懸。て。持。行。き。此。火。切。白。火。切。杵。を。袋。あ。ら。み。お。ら。頭
り。火。繼。と。云。り。さ。る。故。に。因。造。の。世。が。は。は。火。繼。と。云。あ
る。よ。も。常。よ。此。神。火。を。用。ひ。て。其。を。お。く。志。む。と。し。て。以。て。い
と。嚴。重。小。し。て。加。り。よ。も。他。火。を。用。る。よ。と。あ。し。さ。て。又。毎
年。正。月。元。日。ふ。火。祭。と。云。て。加。此。神。代。の。火。切。白。火。切。杵。と
云。を。祭。る。と。さ。り。又。毎。年。十。一。月。中。此。卯。日。よ。因。造。の
大。庭。社。よ。お。ま。て。新。嘗。會。と。云。お。と。何。り。て。因。造。は。じ。め。て
新。穀。を。食。ふ。此。時。を。熊。野。社。より。火。切。板。を。切。杵。を。彼。社。人
持。來。て。火。を。切。出。て。饌。を。や。く。の。子。で。因。造。よ。獻。ぶ。式。何。れ
其。熊。野。社。人。此。持。來。る。火。切。板。を。長。さ。三。尺。許。廣。さ。五。尺。五
厚。さ。一。寸。五。分。か。り。細。き。空。木。此。ま。ろ。木。よ。て。是。は。板。杵。と。も
六。寸。ば。か。り。あ。る。細。き。空。木。此。ま。ろ。木。よ。て。是。は。板。杵。と。も

ふ年毎よ新ふ造きる物よて是を以て火をもみ出に
りさて又神水と云え意宇郡山代村よ天真名井と云
り式ある眞名井神社と云ふかの大庭社と云ふ十四五
町東北の方よあり因造新嘗此時此井水を用ふる
ぞ。せり。上の伊邪那岐命に火産靈神を斬給へ
ふ。是時の血激そくぎて石礫樹草ふ深れる故ふ草木沙
石も自然う火を含ませり。片端を語り傳ふる
まど何物よまき火城含み何處よまき火此有こを
傳を見て悟り扱べし。猶上代ふ火を切出たる故事を大
の或垂仁天皇卷景行天皇卷あどよも見え
記せまば其処よ注ふを合せ見べし。○白云は即此と
下下の祝詞をばして云ふ。此も櫛八玉神の白に
ゆ。前よ高皇産靈神の勅よ大國主神の祭祀を主む者は
天穗日命そと詔へれむ此祝詞を天穗日命に白し賜

ふばき事れまども櫛八玉命の鑽まる火あ
る故。やがて此命の祝言白し給へゆれり。○所燧火者
は伎禮流肥波と訓はし。○登陀流ハ既上よ註せり。第
十五段の○天少新巢ハ神皇産靈御祖命の宮に御厨乃
傳見べし。○御巢亦。御巢の亦も既よ注せり。第百十五段の○凝
烟ハ本籍ハ訓凝烟云州須と云。和名抄ふも唐韻云。始
煤灰集屋也。和名須くせ見也。師云。万葉九。廬八燎須酒
師競。冠辞考云。ふせやよ。十一。難波人葦火燎屋。火酢
四手雖有。此切りたる。び。たまらも凝烟のこせれり。○迄
八拳垂焼。擧とは。師云。火を繁く燎。且久。經て。凝烟の多
死由の祝言亦。垂を多流くと訓むハ非あり。自垂物ハ
みあ多流をよそい多流くと云。物を

他より令レ垂ル。ちて於高天原者と云るハ。盛カ小燎テ。烟の高
く起登ルるおををいみじく云は詞よて。宮造レを於高天
原水木高知と云を同意お也。次ハ地下者ト云ハ對シひと
於テよく云。ちて高天原と云うら。其處ニ坐ス神ル此宮の御巢
を云ふ。懸ル物おまバハ。ちて然神皇產靈御祖命也。
と云はち。於高天原者と云う因て。假リ設テ言ハせは乃
みふて。實ハる。此度造れる。大國主神の新ニ死御舍ニ
御巢を云お也。今云信ス此師説の如く。神皇產靈命也と
神ニ坐テ元より後ノ事ヲ執リまして御厨此事をあらし看
せテあり。其ニ第一段ニ此大神の御上をま残せる處考
牙合ス。ちて御巢を新巢としも云はも。新ニ造リは御

巢あるが故お也。○底津石根ハ。上リ註せは如く。地底の
石根ハ也。○燒凝トと。師云。竈の下此土を燒テ石ニ如
く凝固スるはもれお也。其ニ甚クしく底津石根まると云を
上へ登ルるおをを。高天原云くと云はよ同じ。神賀詞ハ白
爪ハ後足爪踏立事波云くと下。ちて上リ此是我云くとよ也。是ま
津石根ハ踏凝トもあり。ちては。火ニ此事を云。此を多伎許良佐牟登麻遠志氏と読切
ては。火ニ此事を云。此を多伎許良佐牟登麻遠志氏と読切
をむ。地詞トもさレバハ。ちて御饗を獻ルるおとを云とて。其
きと。猶然トもあらハ。ちて御饗を獻ルるおとを云とて。其
火を切リ出スるおをを。如是委曲ク云て。其祝詞までを載セ
は所以ト。上リ大國主神の此御舍此事を白し賜へるよ
も。御巢此事を主ト請ヒ申シ賜ハる故お也。此ふ付ても上

代小火を嚴重く忌清^{ミキヨ}免し^ミ不^ミを思ふ^ミ。上^ミ此^ミ豫^ミ美^ミ因^ミ。
段^ミある^ミ豫^ミ母^ミ都^ミ戸^ミ喫^ミの處^ミ云^ミ。流^ミ言^ミども考^ミ合^ミせて^ミ。今^ミ云^ミ。
八^ミ段^ミの傳^ミ。○^ミ栲^ミ繩^ミは^ミ栲^ミ木^ミ此^ミ皮^ミ以^ミて^ミ糸^ミ牙^ミ流^ミ繩^ミふ^ミ。上^ミ代^ミ。
見^ミべし。○^ミ栲^ミ繩^ミの事^ミを^ミ第^ミ百^ミ十^ミ。
は^ミ皆^ミく^ミ何^ミも^ミ用^ミひ^ミぬ^ミ。流^ミあ^ミと^ミ。既^ミに^ミ註^ミ牙^ミゆ^ミ。栲^ミ木^ミの事^ミを^ミ第^ミ。
栲^ミ繩^ミの事^ミを^ミ第^ミ百^ミ十^ミ。
六^ミ段^ミ此^ミ傳^ミよ^ミ注^ミへ^ミり。○^ミ千^ミ尋^ミ繩^ミを^ミ師^ミ云^ミ。ぬ^ミ。長^ミき^ミ枝^ミ云^ミ。此^ミ。
さ^ミら^ミふ^ミ言^ミを^ミ重^ミん^ミて^ミ云^ミこ^ミを^ミ。天^ミ津^ミ祝^ミ詞^ミ乃^ミ大^ミ祝^ミ詞^ミ天^ミ雲^ミ火^ミ八^ミ。
重^ミ雲^ミ眞^ミ王^ミ手^ミ火^ミ玉^ミ手^ミ火^ミと^ミ古^ミの^ミ雅^ミ語^ミ此^ミ常^ミあ^ミり。○^ミ打^ミ延^ミハ^ミ上^ミ。
件^ミの^ミ千^ミ尋^ミ繩^ミを^ミ河^ミよ^ミ引^ミ延^ミる^ミ由^ミり^ミて^ミ。今^ミも^ミ大^ミ河^ミ邊^ミに^ミる^ミ漁^ミ者^ミ。
ら^ミが^ミ物^ミに^ミる^ミ態^ミあ^ミる^ミが^ミ。此^ミを^ミ延^ミ繩^ミと^ミ云^ミあ^ミり。其^ミ釣^ミ流^ミ状^ミを^ミ加^ミ。
此^ミ長^ミ繩^ミふ^ミ。七^ミ八^ミ尺^ミを^ミ加^ミゆ^ミお^ミく^ミ間^ミお^ミま^ミて^ミ。三^ミ尺^ミ許^ミお^ミく^ミの^ミ繩^ミ。

を^ミの^ミま^ミと^ミ垂^ミて^ミ。そ^ミ此^ミ端^ミご^ミを^ミよ^ミ鉤^ミふ^ミ魚^ミの^ミ肉^ミを^ミ付^ミぬ^ミると^ミ鉛^ミ。
の^ミ玉^ミを^ミ付^ミて^ミ河^ミ中^ミよ^ミ引^ミ延^ミた^ミま^ミや^ミ。程^ミあ^ミゆ^ミて^ミ引^ミ揚^ミ流^ミよ^ミ。數^ミ。
此^ミ魚^ミそ^ミ此^ミ鉤^ミふ^ミか^ミり^ミて^ミ。引^ミ揚^ミら^ミ流^ミも^ミ此^ミあ^ミり。此^ミを^ミ即^ミそ^ミ。
乃^ミ態^ミを^ミ云^ミ牙^ミ流^ミあ^ミり。此^ミの^ミ千^ミ尋^ミ繩^ミ打^ミ延^ミの^ミ事^ミ。記^ミ傳^ミよ^ミ。釣^ミ船^ミ。
此^ミ延^ミ繩^ミの^ミ事^ミを^ミ第^ミ百^ミ十^ミ。
見^ミら^ミれ^ミざ^ミる^ミ故^ミふ^ミ季^ミう^ミら^ミば^ミ己^ミい^ミよ^ミし^ミ。第^ミ下^ミ總^ミ因^ミ常^ミ陸^ミ因^ミあ^ミ。
と^ミ周^ミ遊^ミら^ミ流^ミ布^ミを^ミ謂^ミも^ミ。坂^ミ東^ミ太^ミ郎^ミと^ミい^ミふ^ミ。大^ミ河^ミ此^ミ邊^ミに^ミる^ミ。
櫻^ミ井^ミ村^ミの^ミ向^ミ後^ミ盈^ミ正^ミと^ミ云^ミ。を^ミし^ミ牙^ミ子^ミが^ミり^ミ宿^ミり^ミて^ミ。四^ミ月^ミ五^ミ月^ミ。
此^ミ頃^ミ此^ミ大^ミ河^ミよ^ミて^ミ。鱸^ミを^ミ然^ミして^ミ捕^ミる^ミ状^ミを^ミ目^ミの^ミあ^ミら^ミさ^ミて^ミ師^ミ。
ゆ^ミ見^ミら^ミれ^ミる^ミ故^ミふ^ミ。今^ミを^ミそ^ミの^ミ見^ミら^ミれ^ミる^ミ状^ミを^ミ目^ミの^ミあ^ミら^ミさ^ミて^ミ師^ミ。
言^ミよ^ミ。此^ミを^ミ打^ミ延^ミよ^ミて^ミ句^ミを^ミ切^ミて^ミ心^ミ得^ミべ^ミし^ミ。次^ミ此^ミ控^ミ依^ミを^ミ云^ミよ^ミ。
係^ミる^ミ言^ミれ^ミま^ミば^ミあ^ミり^ミ。と^ミ有^ミり。○^ミ爲^ミ釣^ミ海^ミ人^ミ火^ミ師^ミ云^ミ。爲^ミ釣^ミハ^ミ都^ミ。
良^ミ世^ミ流^ミと^ミ訓^ミ流^ミし^ミ。釣^ミ有^ミを^ミ云^ミ意^ミあ^ミり。都^ミ流^ミを^ミ都^ミ良^ミ須^ミ都^ミ礼^ミ流^ミ。
多^ミ都^ミ良^ミ世^ミ流^ミと^ミ云^ミを^ミ古^ミ。

語の格あり必しも尋む辞あらても然云の例多し。ま
 然訓べき処よ為字を書る例も万葉あども多うり。都
 理須流よを非交今云前よを師の此訓違ひて思ふ旨
 後ふまゝと熟し思ひて其訓のあしむ。ちて此も海人火を
 事を悟りて再び師の訓よ從ひぬ。ちて此も海人火を
 云ふて句を切て心得法し。海人火釣きる鱸と次此言を
 隔てて佐く和く通字係る言おれぬ。○口大を師云。
 大口を寫し誤れぬあゑべし。万葉ふ狼をも大口乃眞神
 と抄ぐ。云云。舊くクホホと訓と某大や下ふ云よ
 ちあ布聞かち。まゝと久知夫登を訓べり。まゝと古事記
 よ。太ハみお假字うて。布刀と此み書る例よ違へり。延佳
 本は師本よをク。口を有り。此も悪うら。延佳
 記の字おひの例も。比呂あり。此も悪うら。延佳
 書て比呂と訓。如きこと。ちて鱸の形を。漢籍をもふ
 はをさく。例あまれり。ちて鱸の形を。漢籍をもふ

め。巨口細鱸と云云。今云此も前よを師の訓よ從を。出
 細とも云。牙口大といふ。め古言あるへく思ひ。ちて
 て。然訓よりし。のぞ。此も後よ思。牙バ悪うゆき。ちて
 ち意富久知と訓。○尾翼ハ師云小鱸の意よ。尾ハ
 借字。云云。いお。云如く古を言を。此み思ひて。字を。拘
 を。書る。あり。若。尾。正。字。と。比。る。時。ハ。小。翼。云。く。と。其。状
 を。云。言。れ。く。て。を。言。足。ハ。云。尾。も。翼。も。万。此。魚。よ。み。あ。有。物
 ち。れ。ぬ。あ。尾。翼。と。の。み。云。て。を。何。の。意。と。も。ちて。小。翼。と
 ぬ。し。古。文。よ。け。る。拙。き。あ。を。有。べ。く。も。非。交。ちて。小。翼。と
 對。言。る。を。以。て。も。上。此。口。大。は。大。口。此。誤。あ。る。あ。と。を。思。ひ
 定。む。ぬ。し。は。と。和。名。抄。よ。鱸。魚。背。上。鬣。也。和。名。波。多。俗。云。比
 禮。と。あ。ま。ど。も。比。禮。を。背。上。鬣。の。み。あ。ら。び。左。右。う。あ。る。残
 も。云。波。多。ハ。左。右。よ。有。を。比。み。云。て。背。上。れ。る。残。を。云。べ。の

らび。然る多波多りも。鱧字多用るを。背上あるを比礼と云て。その比礼ハ。左右の波多よもわと名れるが故よ。そまよ引きて。波多よも此字を用ふるおほべし。斯て此は翼字を書まむ。左右あるを云おを元とす。左右の鱧ハ。鳥此翼と同左右の波多とも比禮とも云。中ふ。袁祁命此御歌よ。志毘賀波多傳をみ見え。はと波多能廣物。波多能狹物おぞ。諸の祝詞よもほまむ。此も袁波多須受伎と訓べし。波多乃を誦付。さて他魚よ比ぶるよ。此魚小翼を云ばり。波多此殊小死物ふも非ざまども。大口よ對牙て。言の文よさも云おべし。必しも小死物おらぬと。小某と云おを常おす。まと字鏡よ。鱧魚脊上骨又伊呂己をあるを。漢籍ともよ。鱧を細鱗と云るを。合せて思牙を鱗を

云るうとも思えるまど。翼字をしも書れば。さよも非じはと魚の波多比礼ハ。普く古書とめよ。まと古事記よも。鱧字を書るよ。此よも翼字をしも書るが疑ハし。さふ。おら。思ふ。若くは。鱧を以て。水上を飛。こと。の。何。物。も。や。有。む。さ。も。何。ら。は。尾。も。正。字。よ。て。袁。波。泥。お。ほ。べ。し。尾。を。翼。よ。し。て。飛。意。あり。お。ハ。物。も。見。え。お。聞。も。せ。ぬ。事。お。ま。ど。ふ。お。思。ひ。よ。ま。る。は。く。よ。驚。か。し。た。く。の。み。あり。海。人。お。ぞ。う。此。魚。の。こ。と。委。く。問。ひ。試。む。お。し。○。鏡。胤。云。鱧。ハ。鱧。れ。ど。此。如。く。能。く。飛。ぶ。物。う。て。蛇。お。ど。此。岸。よ。在。る。を。発。揚。め。て。取。食。ふ。も。此。あり。と。ぞ。さ。て。鯉。の。五。六。寸。も。し。く。七。八。寸。許。あり。と。殊。う。よ。く。飛。ぶ。故。○。鱧。ハ。本。籍。よ。訓。鱧。云。須。受。伎。と。何。す。師。云。和。名。抄。よ。崔。禹。錫。食。經。云。鱧。貌。似。鯉。而。鰓。大。開。者。也。四。聲。字。苑。云。似。鰓。而。大。青。色。和。名。須。く。木。と。見。也。万。葉。三。ふ。荒。栲。藤。江。上。浦。爾。鈴。寸。釣。白。水。郎。云。く。十一。よ。鈴。寸。取。海。部。上。燭。火。お。ど。と。死。す。魚。を。種。く。多。

かる中よ。此ふかく鱸をしめ云。依之。出雲の海よ。此魚殊
 ふ多く。ばと佳き。う産て。杵築神此御贄よも。殊り獻じし
 也。或人云。出雲の海よ。今も佳き。鮪あり。出て名あり。彼
 因。漢圀の松江此鮪名高き。小風土記。う之。嶋根郡。秋鹿郡。
 神門郡。あぞ。此内ふ。品く。産物の中ふ。須受。枳も見え。あま
 ぞも。殊よ。多。祀。お。や。ま。多。佳。こ。や。あ。と。見。え。ば。○佐和佐
 和。邇。師。云。此。言。仁。德。天。皇。此。大。御。歌。亦。有。也。噪。く。み。あ。り。
 万。葉。四。小。珠。衣。乃。狹。藍。左。謂。沉。十。四。安。利。伎。奴。乃。佐。惠。佐
 惠。少。豆。美。冠。辞。考。云。夫。の。遠。き。旅。よ。出。立。時。よ。妻。が。や。あ。る。
 狹。藍。左。謂。佐。惠。佐。惠。も。皆。通。音。う。て。同。言。あ。り。此。を。釣。取。と

依。千。万。の。鱸。を。海。人。ぞ。毛。の。挽。寄。り。と。て。呼。ぶ。聲。く。此。誼。く
 噪。し。起。を。云。重。き。物。を。挽。り。ハ。必。さ。を。奉。る。も。の。あ。り。は。と
 こと。小。は。て。此。言。ハ。上。の。海。人。少。や。云。と。め。續。々。て。心。得。ば
 し。鮪。よ。り。非。也。凡。て。此。處。ハ。こ。と。は。罷。下。上。と。語。を。入
 之。亂。了。て。文。を。あ。せ。る。物。あ。り。○今。云。上。ふ。め。云。下。総。圀
 櫻井村。よ。て。延。繩。し。て。鮪。を。釣。捕。る。さ。は。を。見。し。時。よ。か。の
 重。り。ふ。付。る。鉛。此。玉。此。黒。く。鑄。と。依。る。魚。形。と。云。を。起
 き。て。ふ。と。思。ふ。旨。あり。て。そ。の。鉛。玉。を。鍊。の。磨。と。る。小。鈴。を
 替。多。お。ろ。し。見。よ。と。云。し。お。盈。正。元。と。也。い。ぬ。く。古。学。を
 好。む。者。あ。ま。だ。易。き。お。や。て。六。七。は。う。り。鍊。鈴。を。も。交。へ
 て。垂。下。し。る。よ。其。鈴。と。よ。一。も。残。ら。ば。鮪。か。り。て。控
 揚。ら。れ。と。り。是。ふ。を。り。て。思。へ。む。上。代。の。鮪。釣。る。延。繩。を。鈴
 を。付。と。め。む。故。う。控。揚。る。時。う。さ。お。く。と。鳴。し。あ。ら。此
 よ。か。く。云。る。う。須。ば。と。云。名。も。須。く。と。鳴。る。と。也。名。け。佐。那
 藝。と。云。名。も。佐。夜。藝。よ。て。佐。和。藝。を。同。言。あ。れ。む。う。と。く

此よ由ありてお不ぬまとは是よ就て思牙む須く伎と云
名を鈴喰といふ言あらむも知べあらば万葉よ鈴寸也
かけるも其由を思ひて書來れる字々彼集ふをさる心
志らびあは文字おひいと多々まむあり例を云はる
高橋氏文れる磐鹿六鴈命の角弭弓を以て堅魚を釣ら
れとる古事のまふく今も黙比角弭ありよ作りて
彼魚を釣ゆをも思ひ合々○控依を奥と巴渚牙挽令寄
べし後人猶よく試してよ
流亦巴祈年祭祝詞よ八十綱打挂引○騰而ハ河よ巴
濱へ取揚るれ巴師云岡部翁を依騰を与佐牙と訓れき
阿牙を与佐牙と云ると未聞ば其上此を依と騰と二
りて延も約然も志と依をのみ古言と思ふハ偏ありハ
○折竹を佐伎多氣と訓ばし折ハ本よ打と何るを舊事
誤れるありと師説師云万葉七了辟竹を何巴破有竹を
よとめて改免也

云れ巴打竹と何るに依て或人ハ空竹の意ありと云牙
か登遠く登遠く○登遠く登遠く彌師云登遠くを多和くと同じく
て物の焼む貌を云万葉八ふ秋芽子乃枝毛十尾二十ふ
爲垂柳十緒ま白杜杖枝母等乎爾或云枝毛あど何
巴はと二了奈用竹乃騰遠依あぞ何るも焼み靡くを云
ゆ此を折竹の簀比上ふ何まとの御贄比鱸を山汁如く
ふ積と依諸の祝詞よ神小供ふ依物ども云云其竹の
焼むばかり多加依状を云れるばし竹比簀小御贄を置
こぞ外ハをさく見何あらねど然るまと有おや覺
しくて袁祁命の御詠詞小魚簀てふこぞ見え大嘗祭式

小置簀と云物も出と_レ也。又思ふ_レ。如此様ふお_レけ_レる詞
此上_カ多_クは枕辭お_レ例お_レま_レ。拵竹を_レく_レ焼_レむ物お
ゆ故_ヨ。あ_レ登遠_クの枕辭_ヲ置_ルれみ_レふても有_レ。外_ハ。若
然_ラ。登遠_クは御饌物_ヲ種_ク竝居_トは臺_ハ焼_レむを云
る_レて。其_ハ机_ヲま_レれ。何物_ヲふても有_レ。然_レ。○眞魚_ハ。昨_ハ。
師云。麻那具比_ト訓_ベし。魚_ヲを那_ト云_レ。饌_ヲ用_ル時の名
お_レ也。只何_トれ_ク海河_ハあるお_レを_レバ。宇_ハ。と云
て。那_ヲ云_レ。此_ハ。ち_ハ。心_ヲ得_レた_レく_レべし。持統天
皇紀_ハ。八_ハ釣_レ魚_ヲて_レふ蝦夷_ノ名_ハ訓_注。魚_ハ。此_ハ。云_レ。難_ハ。万_ハ葉_ハ五
ふ。奈都良須_ハ魚_ハ釣_レ。お_レま_レら_レ釣_レ魚_ヲ。饌_ハ。此_ハ。料_ハある故_ヲ。那_ト云
也。今_ハ。世_ハも鮮_ハ。よ_レる魚_ヲを須志那_トと
云_レ。ひ_ハ。魚_ヲをひ_レさ_レく屋_ヲ那夜_ト云_レ。ち_ハ。菜_ハも本_ハを同_レ言

ふて。魚_ハ。ふ_レま_レれ菜_ハよ_レほ_レま_レ。飯_ハ。副_レて食物_ヲを。凡_テ那_ト云_レ外
也。菜_ハと魚_ヲを別の言_ハ。此_ハ。如_ク思_フ。ふ_レ文字_ハお_レお_レた_レる後
此_ハ。く_レせ_レあり。今_ハ。世_ハも菜_ヲを字_ハ音_ハよ_レて。佐伊_ト云_レ。とき_ハ。魚
よ_レも和_レる_レ如_ク。古_ハ。那_ト云_レ。名_ハ。魚_ハも菜_ハよ_レも已_レと
れ_レり。ま_レあ_レ着_レる酒_ハ。魚_ハよ_レて酒_ハの菜_ハ。用_ルふ_レる意_ハあり。万_ハ葉
十一_ハ。朝_ハ魚_ハ。夕_ハ菜_ハ。お_レれ朝_ハも夕_ハも那_ト一_トお_レゆ_レ。魚_ハと菜_ハを
字_ヲを替_レて書_ルは。魚_ハ菜_ハ。ふ_レ涉_ル名_ハお_レゆ_レ故_ハ也。其_ハ。那_ノ中
小_ハ。菜_ハよ_レ也。魚_ハを饌_ハ殊_ハよ_レ賞_レて。美_キ物_トと_レる故_ハ。稱_レて眞
那_トハ云_レ也。故_ハ。麻_ハ。那_ハ。魚_ハ。限_リて。菜_ハよ_レを涉_ラぬ名_ハあり。
今_ハ。世_ハも麻_ハ。那_ハ。箸_ハ。麻_ハ。那_ハ。板_ハ。お_レ云_レ。ふ_レも。魚_ハを料理
る具_ハ。限_レれ。ち_ハ。て眞_ハ魚_ハ。昨_ハ。云_レ。名_ハ。日_ハ。中_ハ。昔_ハの記録_ハ。ま_レ。外
ゆ_レ名_ハあり。ち_ハ。て眞_ハ魚_ハ。昨_ハ。云_レ。名_ハ。日_ハ。中_ハ。昔_ハの記録_ハ。ま_レ。外
ぞ_レ魚_ハ。味_ハと云_レ。今_ハ。俗_ハ。魚_ハ類_ノの料理_ハと云_レ。ち_ハ。事_ハと聞_レ也。
○將_ハ獻_ハ。白_ハ。矣_ハ。ハ_ハ。本_ハ。籍_ハ。よ_レ。獻_ハ。也_ト。あるを。か_レく文_ヲを成_セる由

は師言ふ多氏麻都良牟登麻衰志伎と訓る。今正しく
あとりて多氏麻都良牟と云こやむ新巢の疑烟ハ拳
垂までと云る如く久しき後までをうけて云詞あれハ
あ上り是我所燧火者ぞ云ると云此まぶ祝詞れめと云
はよ據れめ師云此を以とく上代の文章ふて記中ふ
ても殊小絶れて比類あれ物ありと岡部大人れいみじ
く賞美尊崇まかざるを信ふ然こぞあり凡て上代の文章
の事近き世までめ知る人さらは無りしを岡部翁
の見得られしを此もまよ比類なく絶世とる眼也なり
はて古事記ふは古事大國主神の自ら吾が住所を云く
と請白し賜へはよも殊よ御巢れおとを申し給ひて其
を主を御饌のおとよ依まざる故ふ其事をれみ右の如く

委細よ記せるを日本紀よた汝應住天日隅宮者云くと
委細よ記せるを日本紀よた汝應住天日隅宮者云くと
あてて次小種く此事等を擧られとまどを御饌のおぞ
れ見えぬえ異あは傳あて今世よ杵築小櫛八玉神れ子
火と云此別火年ごとの七月四日よ身逃の神事と云と
を何り海の底れ塩砂をたせよ包み塩をやきて明日五
日れ大社れ神事よ献るあり身逃と云と云しハりの別火
國造れ宅よもきて此神事を行ふ其日を國造宅を出
て他所り居ることまふとて云とぞさて大社の末
社よ湊神社と云ありこま櫛八玉命を祭ると云云

於是經津主神健御雷出男神

以岐神爲郷導而周流削平而

逆命者斬戮歸順者神和和出。

荒振神等則神問問出神攘攘

而語問出磐根樹立艸出片葉

亦令語止而於中不服出星神

天香香背男者津甕星遣倭文

神健葉槌命則乃服矣此經津

主神因巡坐時來山因出地而

是土者不止見欲也詔矣故云

山因即有正倉亦天石楯縫直

出處於今云楯縫也。

於是ハ。上件大國主神の杵築宮に鎮坐の時、乃薦岐神、
於二柱神而此神代吾而當奉從と宣牙依を受とす。○郷
導ハ美知備伎を訓べし。舊くクニノ三チヒキと訓とれ
郷と通へり。郷國の郷
非空と云るが如し。抑葦原中國の荒振神等を平和し
坐るまぢは經津主健御雷二柱神也。御稜威に依ことふ
は有れどまこと岐神嚮導して御前ふ立給牙る故ふ。枉神
妖鬼をもれ。殊よ恐怖して速く神功竟給へる。そ有
る依。其を岐神ハしも。伊邪那岐命の豫美都國を平荒び
疎び來依物を攘むと所念疑し坐る御靈よりて成
坐依故よ。豫美都國よ屬る物を撥平依功あると。既ふ

云す。第二十二段の傳。然依よ。當時世よ疎び荒とめし妖
神どもは。上よめ下ふも注る如く。豫見都國の穢惡よ因
て成まる神等れる故よ。二柱神の國巡りて其妖神を攘
むむ時ふ。此神を嚮導とせむ。速よ其功れ成あむ事よ所
思志て。大國主神の薦給へしれぬ。果して御思慮の
如く。御削平此功績れ伊豆速有しと。此段見とるが
如し。さきむ大國主神の是まで國巡り作堅給荒振神を
平あるへる時も常よ此神を嚮導とし給ひむと
とは云もはて經津主健御雷二柱神也。伊邪那岐大神と。
火産靈神との御怒す坐る御靈ふ因て成坐し。此因む第
十五段を
見て知。豫母都國此事惡ひ給ふ。御靈よ因て成まる。岐神

を共ふ。因平の功を成る万牙は事趣を於らく見も
 て也。伊邪那岐神。そ此御祖。産靈大神の大御心を御
 心として。宇都志伎人草を蕃息し給をむと。所念凝し坐
 依御恩頼の何事ふもあま。天の下ふ御在せざるを
 有りと有し事蹟どめ。無窮ふそ此驗有あ。深く思ふはし。
 ○周流削平而は義を得て。舊く米具理都く許登牟祁氏
 と訓るを用ふる。舊く削平をタヒラ。グとも訓み。万葉
 あぞ我こそタヒラ。グと云ひ。神多。あひらくとハ。争。且
 う云む。字よれみ。抑りて古語知らぬ。非訓あり。且
 周且事趣るあ。事趣と。背々依者を。此方牙令向て。
 歸服しむる意の言あるあ。既よ委く註せぬ。第百六段
 の傳見る

し。○逆命者。此を義を得て。麻都呂波奴毛能と訓はし。舊
 志。シタガハ。ヌ。モノと訓る。言義ハ。逆命字。ま。日本紀よ。
 去きも悪きよ。あら。言義ハ。逆命字。ま。日本紀よ。
 不服不順あ。見え。古事記よ。不伏とも。あ。字ふて。辨ふ
 ば。し。あ。布委くハ。神武天皇。○斬戮ハ。伎理波布理を訓る
 し。舊訓。コ。ロ。ス。と。あ。れ。と。言。足。ら。び。上。ふ。速。須。佐。火。男。大。神。段。よ。切。散。其。遠
 呂智。見え。崇神天皇。卷よ。斬波布理其軍士とも。あ。し。委
 ハ。彼。外。よ。注。ま。見。べ。し。○歸順者。古本。ふ。斯。多。賀。布。母。能。を。訓。る。を
 用。ふ。は。し。ツ。ロ。ハ。ヌ。モノ。と。あ。る。訓。も。悪。う。ら。務。ど。上。り。て
 調。と。け。れ。下。ふ。あ。ま。て。事。を。承。る。意。れ。言。あ。し。○神和。く。火
 神。神。議。神。集。神。逐。神。避。神。隨。あ。ぞ。の。神。を。同。じ。く。神。の。御

態ある故よ。冠とる尊辭あり。次ある神問神攘も。此よ準
へて知べし。和ハ即字の如くふて。柔和ヲ治むることを
也。此本籍よ。仍加褒美とあれど。漢紀きこれヲ却崇
神詞。經津主命。健雷命云々。神和。給氏とあるよと
りて。改免於漢籍どもよ。安撫降。○荒振神等。おを天神此
民。おと云よ似とる意を有あり。○荒振神等。おを天神此
御命。ふ順ひ依來びて。疎くし死神をひろく云る中ふも。
專とを伊邪那岐命。豫母都囿の穢惡よ率て。棄給牙は
御服物よとて。成出ある八柱神ふて。海陸に住て。枉態
を行ふ神等を云牙は。委くを第二十三段の傳
男命。御荒の時とめ。所を得て荒び發覺。言語を燃草木を
は牙よ。喧響起て言語し。此事第四十三段の
傳よ注るを見べし。此時まで

れ不靜らび在しおと。上よ既ふ注牙るが如し。第百六段
の傳見る
し。○神問く。火は師云問を登波斯と云は。延と依言ふて
古言の常あり。凡てかく延て云は。もせハ必しも崇覺言
ふめ非ざとしふや。賤き者れう牙よも。多く云る例あり。
然きども。たれおのら崇むる言いぬあれは也。祝詞考
とをしまを綴とるあり。と言れハ違へり。後世記録文
おぞよ崇覺て云とて。令問給。令行給。おどあるを。もと假
字文。おをせ給ふや。せ給ふれ。せやうお云るを。眞
字。おさは書成せるあり。其おハせ給ふや。せ給ふは古
の延言。おはし給ふや。おし給ふの轉れるよ。○神攘く
て。令の意。ハ非び。此格。おれ。お詞も同じ。○神攘く
而を。神問く。給牙と。歸順奉らて。れ不荒ぶ。依神等を。攘給
牙るをいふ。大誠。詞後叙よ。荒振神等乎波神問。志尔問。志
賜比。神掃。尔掃。賜比。氏とある所よ。神掃云々

荒振神は係り神問云く、むねと大名持命は係る也。然れども云く、神半波神問志尔云く、荒振神等乎波神掃云云と分て、あるべき事あるも、あつ荒振神等とのみある也。大洛持神も荒び給へ、依ごと聞えて、いかぢあまども、語を省きて、かくも云、**ちて其攘給子依趣え。坂比御尾**きりやと云れし、非交、**おせよ追伏せ。河の瀬おせよ追撥ひ。斬散すも爲給ひん**む事也。言はくも更あるの上よ。岐神の伊豆速き嚮導ふ。枉神の首渠者足留むべき所を得交て、遠く御国比地を逐えられて、底依比他国く、牙逃避て、其国くよ住るが多かる。と所思とす。オホエ。そを何よ因て知れると云ふ佛籍らを始見れば、夜叉羅刹陀祇尼毘那夜迦あど云を始免いと、読枉くあき物どもの量、あく多く、其等が如此してむ幸子てむとて、傳へとりと云、法どもを見るよ、言ふ絶とる穢き事どもある也。當時逐えれと依枉神どもを、豫美都国

の穢惡よとりて、成出とる故、汚き事にあまむ所得て伊豆速ぶる性あること、須佐之男命比高天原を汚し給、予りしう、荒び起さ依よ思ひ合され、まご古の式、外、困人比参れる時と罷れる後と、道饗祭とて、久那斗也、塞神を祭に給ふことを、参ま依時の道饗祭を、外、困人比きて來らむ、蕃神多掃ひ罷れる後、比道饗祭ハ、外、困人比歸れる跡よ、彼りあき來あつ蕃神の残り留まゆあむ、事をたおしての御祭ある也。此時比由縁よとすて、行ひあまふ神世とり比御式、依、**○語問、少磐根云く。かく語**、**問ふ、依じき物ども比語問、予るハ、彼、枉神等の響ひ立て。**喧し、依妖態、依あま、上ふ云、予也死。第百六段、此**○令**、**語止而ハ、本籍どぬふ。あつ語止、氏とあ也。此を師説よ。止**、**氏と云、依え。今世の心を以て思、予ば、自止ある。如く聞え**て、**片葉平毛といふ、予叶を燃ごと聞、あれど、然らば、夜**

米を令止の約とほふれば。他をして止しむは意あり。たまは自れうすふいふ時もおれおのら止おせよは。夜美といひて夜米とは云ひ。夜米をあと更よ止免むと思ひて。止候おせよ云ひ。せあるよ據て目易く記せるおひ。
シメテとも訓むべし。セサテ 儲か、流物ども。青水沫さすよ語問
テとも訓むべし。セサテ 喧ぐはしは。彼、枉神妖鬼の態おひし故。それ被逐とり
ソノマツロハカリレ ちるば。此物等此妖氣も。皆止免ゆしれ也。○其不服火とは。葦原中囿ある枉神妖鬼どもは。みお事趣逐ひ給へま
サカ ぞ。中囿を放りて。虚空よかくれる星神れる故よ。あぐ此
ホシカミアマノカバセ 神のみ不順よしれ也。○星神天香く背男亦名天津彗星 まお星

れおせを。和名抄ふ。説文云星萬物精上所生也。和名保火と何也。
説文今本よち萬物オホゾラ 精上為列星とあり。大空の上方よ夜光りて。量おと多く。大小群くせ見お流物此總名あり。万葉七詠天歌
ソラノウミニクモノナニタチツキノホレ 天海丹雲火波立月船星火林丹榜隱所見と詠るも。群
ホレ 群といせ多死故よ。星火林と云也。
因よ云む此哥の天 海を今本おアメノ
ウミ 三を訓とせと。拾遺集雜よ。人丸と保火てふ言義ハ。未
ホレ 挙て。そらのうみせあり。是古訓あり。天安河所在五百箇
ホレ 知らぬ。漢籍よ。星石也。と見え。火石を天安河所在五百箇
ホレ せ。下よ引る天書よ。因れる非ことうて。論よ足らぬ。凡て
ホレ 物の丸く細おる。粒くと放れと流を常ふ保志と云り。
ホレ 此の星をり轉れ流ふて。同言あるべし。けりて漢籍をもふ
ホレ 星隕て石とあると云とせ見え。ぬれども。眞の星を落る
ホレ 物うハ非也。怪しき石の星れ如く光りて。墮そめく此
ホレ るおともあるを星ありと思へ流おひり。

物のこと。諸外、固くよて種々論ふ説ども聞ゆれども萬物に精上て所生と云字始然みれ推量の説等よて古傳ありて言牙、亦非ざまば總て信う足らば其成始然を神因の古傳よ本おきて知よ外れし。第五段よ注せる佐藤信淵が説見 ぼし藤原濱成然しの天書と云物よ其始を記して經津主神者天上鎮神也其先出自諾等初諾等斬温突血成赤霧天下陰間直達天漢化成三百六十五度七百八十三磐石是謂星度也精也氣化為神号曰磐裂是謂歲星也精裂生根去是謂螢惑也精去生磐筒男是謂太白也精男生磐筒女是謂辰星也精女生經津主是謂鎮星也精とある天書ハ弘仁に頃よ記せる物なきを古々まど此を漢籍よるふ足然れども其質はあの大地を同じ質の物にて大地の大空よ浮漂ひて在ごとく群くと見えおくも各々

躔度を差牙に虚空よ浮係して天日れ旋動く勢氣よ掣れて旋る物ぞと云ふ説を數百千歳くはぐよ考牙て。決然と説よて外固人の言れおら信ひ從なき説おはけ也。是らの説ども西洋此固くある人々はて星神とい 牙バ其を司る神と所聞とほよ孰れ星よ住然る神ぞや云おきば知ぼうら然せ香く背男とい牙は男神よて香香ハ炫背は佐衣の約よて清明き意を死おえはと天津甕星とい牙を直り星を云る如く聞ゆれども此神をば殊ふ卑然て神とめ命をも言ざほよて實ふを天津甕星神と云意あり其甕ハ甕速日神の甕とたれじく伊迦と

通ひて嚴く大飢るを云言ふ也。季くむ第百十三段の然

れぞ此神ハ衆星此中ふもぞ母大く嚴く見也衆星よ住

て衆星を總司むる神あはれこと疑ふし。忌部正通神代卷

彗星也といひ或説ふ香く背男ハ小威を耀口訣光形似彗

る故ふ其惡天ふ通りて妖星見はれし故ふ星神と云り

と云る類の説どもを総て論ふり足らび殊ふ彗星を妖

星ありと云を漢固ふり死さる私説よこそあれ案よを

折く見ゆる何ぞもれき星よて謂ゆる推歩のわざを

く究まらむハ何時出あむと云ことも考知られむ

星あはれくかて衆星の中ふ嚴く大あはれ星はと探

ぞ所思る。 依ふ謂ゆる五星此中ある金星あはれはく所思と也。謂ゆる五

星也金星木星水星火星土星是れり金星を依と大白星

とも長庚星とも云木星をまよと歳星とも云水星をまよ

辰星と云火星をまよと螢惑星然るを五星此中よも卓れ

と云土星をまよと鎮星と云ふ

て嚴く見え此星れみ御固の古地名聞えて其餘を所聞

ることに無きばれ也其はま抄万葉五よ明星少閑朝者云

云夕星乃由布弊爾奈禮婆云くを訓る明星夕星ともふ

大白金星をいす也其を漢籍どもよ。大白星晨出東方爲

啓明昏見西方爲長庚也と見え和名抄り兼名苑云大白

星一名長庚暮見於西方爲長庚此間云由不豆くと見え

此方よ人の往去さはる。大白星此晨ハ東ふいで暮ふ

は西了去て見ゆる。譬とる哉合せ考へて辨ふべし。

星朝ハ東よ現ハ暮よ西よ現故ヨ俗ヲ宵此
明星晨の明星と云ふ能の小謠ハ明星と云ガ有りて其
詞ヲ有り抄キ此明星ハ西
ヘチろり東ヘチろり云々然ル哉和名抄ヨ大白星ヨ阿
加保也といふ訓を出さズ別ニ兼名苑云歳星一名明星
此間云阿加保也と有るは誤也
星とある故ヨ其字ヨリテ設ケる名あるヲ誤リテ
古ク阿加保也と云シハ大白星ある事を忘れて如此
奉ト有る由凡古ク星の名ハ聞エテ協ハ大白星を
阿加保也由布豆ト云ト外ハ謂也二十八宿の
中ある昂星を須ハ流也云彗星をハハ保也流星を
ハ比保也と有るは其状ヨリテ名ケト有るヨ古
名ト聞也れ牛を比古保也以奴加比保也と云織女
を太奈ハ太豆女ト有るハ漢籍の妄説ヨリテ負
ト有る名ヨテ論フヨ足ラズ此ハ序オモセ云也
圀の古ク諸蕃圀ノ如ク星の名をオモセ云也
巴しと云テ師の言レト有る如ク雲霧オモセ比如ク見
有る故ヨヤ有ラビま和訓彗ヨヒトハ先ク見
和名抄

ふ。大白神を訓ぜり。新撰陰陽書よ。大將軍者大白也。精天
上客と見也。一曰。巡の義あるべし。大白星也。とぞ。曆林
問答よ。云く。百事犯用土。大凶。十二年運行。四方をいへぬ。
○ひとよめぐ。正。大白神と同じき。ふや。ぬさ。かりの神。お
正やいへ。正。金葉集よ。君こそハ。一夜めぐ。正。此神ときけ
れど。逢こと。のう。とた。が。ふら。む。と。何。正。あ。布。彼。此。見。也。ま
ど。煩。引。出。其。神。樂。歌。次第の明星也。云歌よ。安加保也。波。

明星波久波也古く奈利也。名仁志加毛古与比乃川支乃。
多く古く仁万須也。と有るは。在。明。星。者。明。星。者。此。者。哉。此。処。
処。尔。坐。哉。と。嚴。光。光。月。見。成。る。れ。も。思。ひ。合。は。ば。
い。ふ。意。よ。て。然。カ。加。正。耀。く。星。ハ。大。白。星。を。た。ま。て。何。う。何。ら。む。然。れ
空。甕。星。と。云。ふ。也。大。白。長。庚。よ。て。香。く。背。男。は。そ。れ。星。神。お
流。こ。を。疑。有。ま。じ。く。所。思。也。倭。文。神。健。葉。槌。命。此。神。ハ。倭

文連の祖よて。文布を織始とる神ある故よ。倭文神と
るあ也。然るを師説ふ。倭文ハ借字よて後取ありせ云れ
しを違へり。思ふること。健御雷神よ従ひて。云々
の事有しを以て。ふと
思誤られしものあり。けて此神の名義まよ倭文と云ふ
物の事も何も既ふ上よ委曲く言す也。第四十八段第四
十九段の傳見る
し。○乃服矣。けしも嚴くて不服也し星神字かく速事
趣給すは亦名を天羽雷命と負給へはふ符ひて。最も
雄く志く猛き神よあも坐くは。此謂よふ事と聞え
て。此神の御裔ハ常陸国よ住て。後までも神供の倭文を
奉れること。此も上り既言へ也。はと鹿嶋神宮此御
前よ。攝社をたおし祀祠あるを。高房社と稱ひ其祭神を

尋ぬきバ。健葉槌命を祭れはとし。古き社記よ見とるは
此の故事を思ふよ。然も有べき事あ也。立綱云。高老美称
房ハ古語拾遺よ。
好麻之所生。故謂之。總國とあるは。生麻の義あるべしと
云り。あ亦此神のことハ。第四十九段よ。委く注せるを見
し。○此經津主神。是よ下也。出雲風土記を採れはあ也。
徴よ云るが如し。○国巡坐時とハ。荒振神事向よ巡也
給子時を云す也。○山国也。本籍よ。意宇郡山国郷郡家
東南州二里二百卅步。凡今の四里三十
町むり也あり。とあり也。此傳を
記せ也。風土記抄。合吉田柿
谷馬木為一郷とあり。○是土者は許能玖邇波を
訓べし。○不止見欲也。其地を愛給ふ餘りふ常よ見欲
あく所思由あ也。○云山国ハ止び見まわし祀土ぞ也

詔乎る故よ。其地をかく號けとる由あり。○即有正倉正

倉ハ富具良と訓て。祠のおとあ依由は既よい乎也。第七十三

段の傳を。けて此祠を。經津主神の取るおと。言はくも更

あ也。○天石楯とは荒振神此射を防ぐを。天よ也持降給

乎依りて。石もて作まる楯を云う。縫直し給ふとあれむ。

石とは堅固を譽て云依り。然れども。石以て造れる楯お

ゆをも穴を穿ちて縫付とる物あらむも知はらむ。凡

石某とあるを。前よ七師言よと也。皆堅固を譽とる言

此ごを思へりしうと。天石屋。天石船。天石笛。おど。皆案よ

石あるを思乎。此楯も堅固を譽とりとのみハ。○楯縫

決ぐとくお事。猶神武天皇。卷よ云をも見べし。○楯縫

を本籍ふ。意宇郡楯縫郷。郡家東南卅二里一百八十步。凡

七九百

故其普都大神。巡行葦原中津

圀。和平山河荒梗出類畢而。心

孖歸天上而。即隨身出器仗甲

戈楯劔。及所執玉。悉雷置常陸

の四里十九町。をの也。此傳を記せ也。風土記抄よ。楯縫郷。清井。清瀬。野外。

クニラヤハレシツメヤマカハノアラブルモノドモヲヲヘテ。オモ

ホレカヘラムトア。メニテ。スナハチ。ミニソヘル。イヅノモノカワラ

信太因高來里而。即乘白雲而。

二柱神共。還參上天。上而奏言。

葦原中國者。皆已言向竟矣。

此段之常陸風土記信太郡此所。高來里古老曰天地權輿草木言語之時。自天降來神名。皆都大神云。是約。此傳あり。即乘白雲還昇蒼天。とあるを本よ採也。次ハ古事記。日本紀を合せて記せるを。徴よ云るが如し。○昔

都大神。おは經津主神と。健御雷神と。我相預て申せり。

所以之。第一百十三役の傳よ言。牙るを味ひ読て辨ふべし。○荒梗之類ハ。義を得て。阿

良夫琉毛能杼母と訓をし。上よ所見とる。荒振神等をい

牙也。○和平ハ。夜波志。豆米と訓をし。万葉二十。夜波

○心存。義を得て。於母富斯を訓べし。天都神の御命此

は。尔く。葦原中國を。和平竟。ま牙は故よ。天。歸昇ら

むと。心存。し。あ也。○隨身。ハ。御身。邇曾。閉琉と訓をし。

○器仗ハ。伊都乃母能と訓べし。前。ハ。本籍。了。器仗。とあ

○。と。二字。欠て有。し。故。よ。器。を。嚴。の。誤。ふ。て。分。注。了。二。字。欠。と。る。ハ。都。惠。あ。る。べ。く。思。ひ。て。嚴。杖。と。成。と。る。を。後。よ。ま。あ。思。牙。む。漢。籍。よ。器。仗。と。あ。る。は。常。よ。て。仗。を。兵。器。刀。戟。の。總。名。す。い。牙。む。分。注。の。欠。字。を。毛。乃。此。二。字。あ。る。べ。く。考。牙。

て改_レ。此は御稜威_ヲ振_ヒ給_フ。用_フ器_ノ義_ヲ。次
よ見_ル甲_ヲ楯_ノ劔_ヲと此兵器をい_フ。○甲は和名抄
ふ。唐韻云鎧甲也。釋名云甲者似物也。有鱗甲也。和名與路
比。ま_ト說文云冑首鎧也。和名加布度_ト。然_レバ甲は。
余呂比_ト訓_ム論_モ勿_レれど。漢籍ま_ト中昔の軍書_ニも
甲首_ニあ_リ見_ユ。旧_ク此_ノ字_ヲを
加夫登_ニあ_リ。書_ヲ來_ルま_ニば。此_モ然_ルや_ハ有_ルむ_ト思_ハれ
ま_ト下_ニふ_レ言_フ。甲_ノ明_神の_{コト}を_ハ思_ヒ合_セて_ハ前_ニハ_ハ加
夫登_ト訓_ム。あ_ハ熟_シ思_ハへ_バ。訶_ヲ和_ヲ羅_トと_ハ訓_シ。然_ルを_ハ新_井
君美_ルの_ハ東_雅。甲_ヲを_ハ古_語。訶_ヲ和_ヲ羅_トと_ハ云_フ。日本_紀。
崇_神天_皇十_年。武_埴安_彦。兵_士も_ハ官_軍。破_ラれ_ト
る_處。脱_甲而_ハ逃_ル。時_ニ人_ノ號_ス其_ノ脱_甲處_ニ曰_ク伽_和羅_ト見_ユ。古_事

記_ス。大_山守_命。水_ヲ沈_ミて_ハ死_給へ_ルを_ハ鉤_ヲも_テ探_ル
ふ_衣中_ニれ_ル甲_ヲ繫_リ。訶_ヲ和_ヲ羅_ト鳴_シと_ハ所_見る_是。
正_レ。今_ノ俗_ニ龜_甲を_ハ龜_乃訶_ヲ和_ヲ羅_ト云_フも_ハ是_ヲあ_め。武_内宿_禰
禰_ヲ。高_良明_神とい_フも_ハ此_ノ義_ニ依_レる_也。師_モ此_ノ考_ヲ
式_ニあ_リ。筑_後。固_三井_郡。高_良玉_垂命_ノ神_社。建_内宿_禰。祠_ノ
巴_テ。高_良ハ_ハ加_ハと_ハ唱_フ。こ_ノ若_ハ。韓_國御_言向_ノ時_ノ。
彼_{大臣}の_ハ服_ヲ給_ヒし_甲。有_ルむ_伊勢_國。奄_藝郡_丹波_國。水_上。
郡_多よ_モ加_ハ和_良神_社。あ_め。式_ヲ出_ス。出_雲風_土記_ス。
も_意宇_郡。式_外。加_ハ和_羅社_ハ。是_ラも_ハ甲_ヲ依_レる_名。
み_ぞ有_ルむ_屋を_ハ葺_ク瓦_ヲ。韓_語。あ_りと_ハ云_フも_ハ然_レ言_ハる_名。
ど_も若_ハ。此_ノ龜_甲と_ハ同_意。本_ト此_ノ方_ノ言_ハる_名。
和_ノ波_ヲ轉_リ。こ_ノも_ハ有_ルむ_此等_ヲ合_セて_ハ思_ハへ_ル甲_也。
此_ノ古_名と_ハ云_フ。說_ハい_ハれ_ル聞_ユ。信_ト龜_甲と_ハ訶_ヲ和_ヲ羅_ト
同_ク。訶_ヲ和_ヲ羅_ト云_フ。物_ノ状_ハ。云_レ。訶_ヲ和_ヲ羅_ト
云_フ。た_ハ甲_冑ふ_ハあ_め。其_ノ名_ハ。此_ノ說_ハ從_レる_也。

はと余呂比と訓むも悪たしハ非也。其は師言此如く。與呂布と云用言を體言よあして。身を取余呂ふ由の名あり。万葉一了。山常庭村山有等取與呂布。天香具山云く。とある。與呂布ハ山の形此足整る。戎譽とる詞ある。同し。即後世の言よも。甲を服ることとを。与呂布と云り。まこと具足と云も意同じ。けて東雅よ。余呂比を云。語を韓の言。あらむを。けて余呂比をいふも。本は甲冑ふおと。協云るハ非あり。名ふ協は。冑も首鎧あまむれ也。は云は。と。冑を余呂比と加夫登とハ云。儲加夫登の加夫は。頭よ服る由の名ある。まじくあそ。まと著々まぞ。登の義ハ未思得也。藤原信西此本朝事始。けて東雅よ。冑此標を笠幟と云あを。は。古と聞え。神也。

代紀了。日神此天磐屋戸よ幽居せる時よ。手置帆負命を。作笠者とも。彦狭知命を作楯者とも。ひを見え。饒速日命天津降の時よ。笠縫等祖天津麻良曾。笠縫等祖天津赤麻呂あど。天孫本紀了見えて。武備の如見ゆれむ。其笠と云し。は。雨を禦ぐ此みあらば。漢土ふ種笠あど云。物の類ありし。鐵冑の制を。そ此始。笠と云。物と云。起れる故。後世ふあ。て。冑此標を笠幟をいふ言此遺をる。や。と言。ま。し。ハ。思合。ま。は。き。事。あり。て。そ。は。鹿嶋神宮の古記よ。大明神天下賜時御甲大非尋常也。甲如椎鐘。是號甲明神。又曰。御笠大明神御笠山也。名通歟とありて。今も神宮の傍ふ。

枝社ありて。甲明神とも御笠明神とも稱せり。かくて鎮
も御笠山といひ継來れり。鹿島神宮の古記と云鹿島大
神宮社例傳記と云物よて。かの大宮司家よ傳ハれる古
記あり。記せる時代ハ知れらる。次りも。かくせば東雅
を正しく。彼宮の古記と云引る是あり。○
ふ笠を胃れ始。あらむむ云。然も有。ほき説ぞかし。○
戈楯劔あどの事は。上り既よ委曲よ註せり。○所執玉あ
は常よ執せ。御統也玉あるべきこと。上ふをり。出
ふ。依王。準へて。覺る。ほし。○常陸信太。因高來里は。和名
抄よ。常陸比太知。万葉二十ふ。比多知を。何。古事記。ハ。
常道と書。師云。比多よ常字を書。ハ万葉十八。殿乃。橘
比多底里。ふ。と。あるは。變ら。常ふ照を。比多底里と

云。此意あり。はと十三よ。常土を書。今本よ。常を。ち
て。知。陸字を書。ハ。陸奥の陸と同。陸道の意あり。古
集頭注よ。常陸也。ひと。ちを。ひと。ちと。ハ。申。ハ。陸を
かちとも読あり。と云。ひと。ち。契仲。ハ。陸。かちとよめる。ほ
と未。知ら。び。ひと。ち。を。ひと。ち。み。ち。古歌。ハ。東道。乃。道。の。は。て
れり。と云。ハ。は。と。ち。然。り。○
形る常陸とよま。依。也。東海道の極。あ。れ。ハ。當。因。風。土
記。了。往。來。道。路。不。隔。江。海。上。津。濟。郡。郷。境。堺。相。經。山。川。之。峯
谷。取。近。通。之。義。以。即。名。稱。焉。とあるは。常道の意あり。と
也。但し。此。孝。德。天。皇。の。御。世。ハ。數。れ。所。を。并。せ。て。今。の
新。治。を。過。て。因。了。被。立。て。と。常。陸。あ。る。因。と。成。お。れ。本。ハ
數。所。并。せ。と。一。因。の。名。と。為。と。る。ハ。所。の。名。あり。し。を。後。よ
は。別。よ。由。緒。弟。子。大。高。秀。明。云。く。比。多。知。は。日。立。比。意。あり
ぞ。有。り。ら。し。

ばし。然るハ此囿也。大皇囿の東極ヒカリノは在て。日の立出る方
あまバ丸也。其は月此始免て見え初ツキタチとする。月立と云う
同じかるばしと云す也。此考たも志ろし。猶景行天皇卷。
倭建命の衣手土漬囿を詔へる下注を見ばし。○信太
は。和名抄よ。常陸囿信太志多ハシと何也。此をも日高見囿
と云しを。後信太囿と稱す也。委くハ應神天皇卷。注ふを見るべし。○高
來里は。和名抄よ。信太郡高來郷あ也。常陸囿誌小。今存す
云す也。寛知集といふ物よも。竹來村を見えとす。けて如此上件器仗イシモどもを
留置トモオキあるふと有れば。其古跡フルキツまホ正倉クラあども存るばき
ふ。聊も其事の所聞キコエざゆえ。最も長歎ナゲカはし死事あ也。神

名式了。此郡ふ。楯縫神社。阿彌神社あ也。常陸囿誌了。二社
共よ。今不知其所在と何れど。楯縫神社は。楯をも留置
まへゆり由何也。ま但し今和名抄よ。阿彌郷もあゆえ。本跡を
れ誤。阿彌神社の在し地あゆべし。由何る傳ハ丸誤なり。
處の古老あども。能く探タカ見ゆ不し死ねざあ也。門人成
云く。今信太郡の内木原村と云よ。楯縫神社と云何り。周
圍五丈餘ハ杉ハ神木何也。旧ノ社あり。即當郡ハ一宮
と云ふ。其近村よも。楯縫と稱ふ。社あども。擬社あり。ま
と同郡竹來村ハ阿彌神社何り。古ノあれよ。杉ハの神木何
り。しが枯て。數百年を経とれども。今ノ大なる根株ハあ
ま。巴ハ旧社あること論あし。此ノ當郡の二宮と云ふ。又こ
の鄰村阿見村を云よ。阿彌神社と稱する社二所何り。此
内ノ一ハ近き年頃出來とる物あま。今ノハ旧ノ社あり。此
さまハ式内のハ何らハ其ハ近郷此人ハ能く言傳へ
て。皆知る處あ也。かく一宮二宮と稱するを以て。當郡

中よ最旧き大社ある事知べし。然るを因詰り、不知所在、
とあるはいと不審き事あり。と云也。率胤を其因
人あれど、此説違ひ。○乘白雲而は所聞とるが如し。是よ
就て神等也。天上と此因と往來し給ふは趣を熟く考ふ
は。天上よ因土よ降給ふうハ。天浮橋よ乗りて降坐
し。天石船と云も、即是あること、第百三十七段よ、委く注を見べし。因上よ天上昇給
ふよ。雲よ乘給へる事と所思とめ。其を伊邪那岐伊邪
那美命御天降の時。邇ニ藝命御天降の時も。天浮橋よ發
せよは更よも云也。櫛玉饒速日命也。天降の時も。天磐船
よ乘して。所を巡見ると也。是よ准乎て思へど。天穗
巡りて降るとあはれも。磐船よ乘てあるべく。經津主建御
雷二神の天降らるる時。建角見命の降らるる時。あとも

磐舟よ乘てある。斯て天上昇給ふ時よ。雲よ乘せは事
こと云も更あ也。此あるは更よも言也。速須佐之男命也。昇給ふるよと
戎白し給ふ御言よ。跋涉雲霧而と也。此まゝいよ。日本
文とのみ見る。天忍雲根命の天津水を取、小昇り給ふ時
は委りら也。天也。浮雲よ乘てと有て。凡て神等の昇る處よ。浮橋よ
乘てと云こと也。一處も有と也。按ふよ。浮橋は。磐船
とも云也。實よ。磐もて造れる物あ也。しうば。高よ昇る也
也。は。神の御所爲よ。得爲あるひ難き由緒ぞ有はき。猶
天村雲命也。天昇らせは處よ。云をも見よ。第百四十三
段の傳見よ。
○二柱神ハ。經津主健御雷、二神を云こと。言ふも更あ

巴。古事記に、建御雷神とのみ有る、異ある傳あり。○還參

故日本紀に、二神乃昇天復命とあるを採ま巴。○還參

上天而云く。師言ふ事此前後を云はく。此復奏は造天

之御舍云くよ巴前よ有るべし。彼御舍を造て云くの事

よて。敕命ありて後の。然れども。大因主神は關する事を

事あるべりまバあり。後まで我も一連先言竟て。然て此復奏申せる事

バ。後まで我も一連先言竟て。然て此復奏申せる事

を云、外巴と言れしは。古事記の。多く事此漏と傳よて

は。然言おまぞ。大因主神は。既天命を承畏みて。天之御

舍の事を請し給へる事ハ。前よ復奏し給ひし故。天皇

祖神。ま二柱神を還遣し。更ふ條く志て。敕ひし。大

因主神まびく。畏めて。言代主神事問はし。健御名

方神も服ひし。うば。彌く。天命ふ違ふまじ。此旨を言立

給ひて。大三輪大神。葛木鴨大神。宇奈提大神。飛鳥大神。お

どを。皇美麻命の近守神と貢置給ひ。おむ當時まで平殘

し。給する。越此八因を平け給へ。依其間よ。彼請し給する

天之御舍も。造竟と巴し。うば。二柱神ふ廣矛を授け。岐神

を薦免て。彼宮よ。長ふ鎮坐る故よ。天皇祖神の命以て。天

穗日。命ふ其祭祀を掌し。免。櫛八玉神を膳夫と爲て。御饗

し。給ひけて。經津主。健御雷二柱神也。大因主神は御薦の

まふく。岐神を嚮導と爲て。荒振神の盡平和し。誅ひて。

神功竟と依由字。復奏し。竟給へ。依あ巴。より。此段までの

事此連キを熟見ミてよく辨ハふカふシ

百九十八

故是時歸順出首渠者大物主

神大國御魂神及言代主神乃

合八百萬神於天高市而帥其

諸神共昇天而陳其誠款出至

時高皇產靈神勅大物主神曰

汝若以國神為妻則吾猶謂汝

有疏心故今以吾女三穗津比

賣配汝為妻宜領八百萬神而

永為皇美麻命奉護詔而乃使

カヘリクダラタマヒキ
還降給矣。

故是時とは、經津主健御雷二柱神の天下を既し事趣竟
ゑり予る時云云。○歸順也ハ麻都呂閉理斯と訓べし。○
首渠者ハ本籍よ比登基能加美と訓也。神武天皇紀よ魁
帥と書て此云比
登誤過伽師言ふ比登基能加美を其の中比長を云と何
也。人子也長比義あるはし。○大物主神崇神天皇紀の歌
ふ於朋望能農也と何也。此神也。大因主神比和御魂神
坐て大三輪よ拜祭り給へる神あること上よ見え。ま
大物主と申ひ御名也。三輪よ鎮坐也御魂の御名ふして。

大因主神の一名よは非ざる故に大方古書どもよ此御
名也。三輪ふれみ申せる事も既ふ註也。第百二十段
の傳見べし。ちて
師説よ神代紀。大因主神の御名初よは大己貴神とれ
み有て。此の歸順する處に至りて。名を更て。かく大物主
神と何るは。即此時よ。産靈大神比賜予は御名あるはし。
神代紀りて。此一段も事の趣まはらはしき故。古來く
さぐさ解誤れりことあり。善せまはまがひぬほし。然る
え長隱矣と云までハ。此神の現身此事大物主神及事代
主神云々云と云は。御靈此事あり。凡て神代の故事現
身と御靈と差別れく語り傳へゑる物ある故。混
事多し。此段も此差別なく。辨多きこと也。長隱と
え。現身の隱多ふを云。さて和魂を皇孫命の御護神を
あし給ふ其時よ。高天原よ参出とひて。御名をも賜
也給事あるべし。故此處に至て。始て此御名を挙る
ゆされを辨ふ。乃八百萬神も御靈を云あり。さて上文

故更修く而勅さ也ハ夫ハ汝ハ云ハとある此ハ於テの條ハは御聖ノのうチ此事ヲを豫メて詔シ賜ヘはあり抑シ如此ノ現身トは御聖トを別テ見ザれむ此ハ段解シてとし一條ノの内ニして前トと後ヲを御名ノうチはさるを以テも此ハ差別アル事ヲを曉スるレば物主トは八百万ノ神ノ首トと云フ。皇美麻命ヲを護リ奉ル。我ハ以テ神ト大人ヲを云フむが如シを何レ也ハ。是ハより以下ニ言フが思フとハ聊シ異ナれ凡テ物ト云フ稱ス萬ノを逆クかゝる中ニ我ハ又ニ對シる者ヲを逆ク指シて云フこと多ク。人ハ彼ノ入ルを此ノ者ハ彼ノ者トも其ハよク轉ジては萬ノ物ヲをも物トといフ。伊ハ邪ノ那ノ美ノ命ノの万ノ物ヲを生給へりとあるを禽獸ノ虫ノ魚ノの類トも生給へる由ヲてそは人ハ又ニ對シて物ト云フる事ハこと既ニ第十段ニ傳スるが如シ。はと移シては鬼魅ノの類ハ更ニあり神ヲをも逆ク物トと云フ。そは物ノ氣ノ物ノ狂シ物ノ態ト託シ物ノ為トと云フ物ノ類ハ是ハありまと神ヲを逆ク

物と云ふことは龍田風神祭祝詞に物知人トとある物祈年祭詞に疎夫ト物能ト自下往者下平守自往者上平守ト來物トとある物能ト根ト固底固与利鹿備疎備トはと正しく尊ニ神ト對シては邪神妖鬼ノの類ヲをも云フ。紀ハ神代中ニ固ニ支ニ毛ト乃チ有ル邪鬼ヲを私記ス。けて此時帥ハ乃チは實ニ師言ハ如ク事代主神ヲを始メ八百万ノ神トも其御靈トぬるレと著シれぬ。隱シ鎮シ坐シ事代主神ハ現身ト青柴垣ニ隱シ坐シ從テ給スる神等も杵築宮ヲを造り給ヒて後ハ解シ散シ坐シ於テ其御靈ヲ帥テ給スるあはれと万ノ世ニ動クまじき師言ハ物主トは其神等ヲを始メ人ハはれ何レふまれありけり。魂トとある限ニまと靈トある物ノ幽冥ニ屬スる限ニ也ハ。万ノ固ノ物ヲまでも盡ク掌シ給スる由ニ御名ヲ了シて信ニ産靈ト大神

此賜予は御名ふぞ有^レなき。崇神天皇の御世よ。此神の御
の御墓を。昼は人の造れりよ。夜を神に造れり。有^レを以
て。有^レゆる神の物主とるよ。と炳^レく。ま^レ同^レじ御世^レ。疫^レを以
流行せ給へるを以て。さ^レは態を行ふ。妖^レ鬼の類よ。物主
とるよ。と著く。ま^レ同^レじ御世^レ。我^レ云^レく。祭りて。外^レ國
人を参^レ來^レし。めむと御託し坐るよ。果して其御言は。如^レく
あ^レに。しあ^レを以て。外^レ國の物まで。掌給ふこと。知られ
ば。主は。土^レ大人^レに約^レす。大^レを例^レに。美^レ稱^レあ^レす。現^レ身^レハ。杵^レ築^レ宮
ふ。長^レよ。鎮^レ坐^レして。再^レび御形を現^レし給ふこと。れきを。三輪
山^レに坐^レり。此神のみ。時^レ々御形を現^レして。種^レ々の事^レに有^レし
を以て考ふ。幽^レ世^レに。大^レ權^レを。お^レに。和^レ魂^レ神^レに。受^レ持^レ給^レふ
事^レと。想^レ像^レ奉^レら^レは^レく。ふ。大^レ物^レ主^レと。申^レり。御名^レ乃^レ。三輪^レよ。拜^レ祭^レ
は。御名^レを。あ^レさ^レるは。師^レ言^レの如^レく。皇^レ美^レ麻^レ命^レに。御^レ護^レ神^レとい

ひ。彼^レ産^レ靈^レ。大^レ神^レの賜^レへ。は。御^レ名^レある^レが。故^レに。重^レみして。の事
れる^レに。師^レ云^レ。然^レるを。神^レ代^レ紀^レに。大^レ己^レ貴^レ神^レの。一^レ名^レども。を
予^レり。撰^レ者の。け^レし。ら^レよ。加^レ予^レ給^レへる^レ。斯^レて。世^レに。此^レ識^レ者
あ^レく。廣^レく。大^レ己^レ貴^レ命^レの。一^レ名^レとの。み^レ心^レ得^レ居^レる^レ。古^レ書^レを。見
は^レこと。れ^レ精^レし^レから。◎大^レ國^レ御^レ魂^レ神^レ。お^レは。大^レ國^レ主^レ神^レに。荒^レ御
魂^レ神^レ。ふ^レ坐^レこ^レを。上^レり。出^レて。委^レ曲^レく。註^レせ^レす。第七十八段。第九
見^レべ。和^レ魂^レ荒^レ魂^レ相^レ俱^レひ^レる。昇^レ坐^レる。取^レめ。◎言^レ代^レ主^レ神^レ。此^レ神^レに
事^レも。既^レよ。委^レく。註^レせ^レす。第百十七段。け^レて。此^レ神^レも。現^レ身^レは。既
よ。青^レ柴^レ垣^レに。隱^レ給^レし^レる^レ。是^レ時^レ。天^レに。參^レ昇^レす。給^レ予^レる^レハ。師^レ言
に。如^レく。御^レ靈^レあ^レす。◎八^レ百^レ萬^レ神^レとは。常^レよ。天^レ神^レ國^レ神^レを。總^レ
て。い^レ予^レぎ^レも。あ^レく。は。國^レ神^レと。ち^レ八^レ百^レ萬^レ神^レを。云^レ及^レす。そ^レは。大

因主神言代主神の素よモト巴ヤ從ユキ子給ひし神等ハ更あヤ巴。是時經津主健御雷二柱神此事趣コトケ了。歸順キツクあヤ巴し。神等の御靈をも悉ミナシ合アヒ子給へ依ヨれ巴。但しそは皆御靈あゆし事も上ふ言コトる説どもを考へて曉トるレ也。○天高市アマタカシ和名抄ワナシふ。大和因高市ヤマト郡ノ多介タケノケ郡とある是あヤ巴。然るふ天アマとしも云は神代紀石窟段一書ふ會アヒ八十五神於天高市云くぞある哉思ふよ。今天上アマノよ參昇巴給ふとて諸神カミタチを合アヒふる牙依地ウヂある故了。其ふ準タケへて稱イる依るレ也。師ウチも高天原の市シ此ことお解トきとれど昇ノボ天アマと云或説シよ昇天ノボ字を乃ナ此下シよ移ウツして看ミると云へれど非あり。ちて和名抄ワナシよ多介タケノケ知チとあるまば。前マよ高市縣主の高市をバ。然訓シうと。其は稍後ヤ此

約言ツクゴトと聞キゆまば。此コトをば正タしく多加伊知タカエチと訓シ也。神代紀今本コふレ也。タケチを訓シとれど古本コよレ也。タケチカあり。又和名抄シ東市司ト比牟加ヒムカ之乃ノ以知ヨチ乃ノ官ツカ西市司シ尔ニ之乃ノ以知ヨチ乃ノ豆加マ佐サとシ師ウチ言コト此コト如シく。凡ソて市シとは。四方ヨ巴ヤ人の集ツ合ドふ處トを云フ。名ナあまば。是時コト八百万ヤマト神の集ツ牙ドる地チある故了。後ノチよ地名チとは依ヨれまヤ巴ヤしあヤ巴。市シハ必カナラしも物賣モノウ者ノ此コト集ツまるをレ大后オホノの御哥ミカよレ也。京キョウをもレ稱イて。夜麻登ヨマデ能許ノ能多ノ氣知キチと御ミ詠ウタませり。但し此コト御哥ミカよレ也。多タ氣知キチとあれど。此コトを哥詞ミカあヤ巴ヤ。故コト殊ヘよレ也。神名式カミナシキよ。大和因高市郡ヤマト。天高市アマタカシ神社ノ。大月オホツキ次ツギ新ニ嘗シも有ア巴ヤ。大物主神。大因御魂神。事代主神を始ハ也。八百ヤマト万ノ神ノをも祭マツルれる社ヤシロあヤ巴ヤべし。清和天皇紀シムズ貞観元年正月シムズ廿七日ニ授マツル大和因天高市ヤマト神ノ傳ツタ。神代カミヤマト八百万ヤマト神會カミヤマト合アヒ于天高市アマタカシ。即シ此コトとあり。○帥ウヂ其カミ諸カミ

神帥ハ。比伎韋氏ヒキケノウヂと訓ツケばし。又あはれ小韋氏と訓むも悪うらむ俗言ヒキソレふ引連

てと云ツケが如し。○共昇ニ天ニ而ハ。天照大御神。皇産靈大御神

此大御許コトふ。參出マデ給タマふヲ依ヨを云フ。謂ゆる朝觀の意は予あり○陳チ其ノ誠ニ款ニ

之ヲ至ルハ。義ノを取リて。其麻都呂比マツロヒ乃麻許登乎ノマコトヲ麻マ袁須ヲスと訓ツケば

し。おハ一ヒト通トウよ解トクむハは。此度歸順コトタビへル事ハ此違タガヒおハ由ユを。

陳チせるル外ヘと解トク釋シべルれド。誠款マコトノケ之ヲ至ルと書カれヌるガ。小

縁ワケからハに聞クゆハ依ヨ了ル就スて。潭ツマく考カふるハ此コト是トキ時トキ歸ツク順ノ

實マコトを陳チ給タマふル事ハ更モも言イふハ志シるハ服ハツ順ノませル素モト懷ノを

も陳チ奏ソウし給タマへル事ハ然シるハ此コト神ノの勤イシみ給タマへル依ヨ固ニ作ツク此

御業ミノサマ也。皇産靈大ミコノウラミ神ノの御命承給ミコノミコトノウケタマふル。伊邪那岐伊邪那美

二柱神ニツチノカミ乃成竟給ナレバタマざる御業ミノサマよテ。須佐之男命スサノヲノミコトの成竟給ナレバタマふ

ばキ道理コトワザあるヲ。彼神カノカミ也。由縁ユヰあリてハ此コトも其業成終コトナレバ交マて。

豫美都固ヨミツクよ往坐イデマし。後ノチよ其舉コトを此神コノカミよ任マカし給タマひ。固修竟ツクシマ

て後ノチ也。天神アメノカミ也。御子ミコよ避ヒ奉タマりて。終ノチるハ其顯固ミツクニの固魂ツクソウ神ノ

を爲ナちテ御諭ミコトノコトをシ故ユ。是ノ事ハ第百十五段ヒャクゴジュウゴノの傳ツタ

見てハ此コト也。固造竟給ツクツクニハハ後ノチ也。天神アメノカミ也。御子ミコよ讓ユ奉タマるハばキ

大義オホキヨウを甚熟イソトクく所シ知シ看ミして坐マしテ。依ヨ固ニ修シ竟マ給タマふル依ヨ

前マと云フ。予ハども。聊チカも天津神アメノカミよ禮レおシき意ノは。持テ給タマハシ依ヨ御

有ア状ノ也。故ユ今イマ其ノ事ヲを白ハクし。己命ミコト此コト勤イシみ給タマへル御業ミノサマハ。始ハジ

ふ皇産靈大ミコノウラミ神ノ。二柱神ニツチノカミよ依ヨ賜タマへル業ノを受ウケ嗣ツグて果ハせる

おはさ。今既ふ道理のまふく。天神也御子よ。天下の顯
 事ハ授奉也。幽事ハ御依しを承賜りてあれむ。是ぞ天神
 此御産靈よとて生出とる。我グ本分の道を盡して。素
 懷をも遂と依りて待り。と復奏し給へる事とぞ知られ
 る。其を次く此條ふ。是時大罔魂神の白。給する事ども
 我思ひ合せて。事代主神まと從へ給ふ八百万神の陳し
 給する状をも準予曉る。第十二段の傳よ委曲く註
 聖よとて。御祖二柱神の神等を生坐る事。状をよく察
 れ。バ。産靈神の愛み給ふ人草。此為よと生坐る。如ま。彼
 二柱神ハ。産靈神の大御心を御心として。無窮よ世の為人
 草の爲とあはさるべき事ども。勤し給へる有。趣あり。其を
 今も替らざるよと。風火金水土五種の神とちを始め。謂

也。造化の事よ預り給ふ神等。今よ至るまで。其功業の
 替はこと無をもて。證とけべし。けむ。其餘の神等とい
 牙ども。各々其功績を立て。本分の道を尽し。産靈大
 神よ。復命白さて。そ叶はざる。義あま。是時。参上ら。あ
 神とち。大物主神を。天皇祖神の愛く。思ふ。人草を。あむ。往
 天皇は。さら。あり。天皇祖神の愛く。思ふ。人草を。あむ。往
 末と。こし。予よ。宇豆那ひ。恵み。給む。事ども。誓白し。給
 て。得。有。ま。じ。き。理。あら。げ。や。又。是。よ。付。て。思。ふ。よ。凡。人。と
 賜物よ。し。あ。れ。バ。其。賜。へ。る。性。を。違。へ。ぬ。神。習。ふ。べき。物。あ
 る。こと。を。知。り。辨。り。て。世。の。爲。の。爲。と。も。あ。る。は。業。よ
 い。そ。し。み。て。終。り。ハ。幽。事。掌。り。る。神。ハ。御。許。は。参。は。さ。ま。ま。
 其。御。後。よ。從。ひ。て。是。時。の。例。は。ま。よ。り。天。下。参。り。て。産。靈。
 大。神。ハ。賜。は。れ。る。本。分。の。道。を。尽。せ。る。事。を。復。命。ま。我。を。
 人の。道。を。古。く。より。人。死。て。其。魂。ハ。天。上。よ。参。上。る。物。
 ぞ。と。い。ふ。傳。は。し。故。よ。昔。の。書。と。も。貴。人。と。ち。の。死。
 正。坐。る。を。ば。神。騰。と。い。ひ。凡。人。ハ。魂。を。母。天。翔。る。と。ハ。云。あ
 め。れ。正。坐。る。を。ば。神。騰。と。い。ひ。凡。人。ハ。魂。を。母。天。翔。る。と。ハ。云。あ
 説。と。も。を。合。せ。○罔神。ハ。高。天。原。よ。坐。神。を。天。神。と。申。は
 見。て。辨。ふ。べ。し。

小對へて葦原中園ある神を云ぬ也。委くハ第六十八段の傳よ注るを見る

妻ハ和名抄よ。白虎通云。妻者齊也。與夫齊體也。和名

米と何也。○疏心は。宇登夫琉許く呂と訓るし。祈年祭祝

詞よ。疎夫留物。御門祭詞よ。四方四角與利疎備荒備來武

云く。餘祝詞ども小母見えと也。後よ宇登美宇登牟宇登

は。即是。三穗津比賣御名此義いまだ思ひ得交。出雲園

あり。三保郷御穂也。崎あど何と此神の名あどは。神名式

然る地名を負給ふべくも非ぬ。餘よ由有べし。小大和園城下郡小村屋坐彌富都比賣神社。大月次相嘗新嘗

何依御社は此神よて。清和天皇紀小貞觀元年正月九七

日よ。從五位上を奉られと也。今藏堂村と云よ在て森屋社とも天王をも白とと

城上郡大神大物主神社よ。間近く立給子也。神代口訣よ出雲園杵築

大神。大后神社也。此姫神ありと云るを甚く違へり。彼社

を須勢理毘賣命よて。本縣大園主神の后神ある故。杵

築大神。大后とある也。此を和魂大天武天皇紀小將軍

物主神の后あり。思ひ混ふべうらば。大伴吹負連村屋の地よて。近江朝の副將。廬井造鯨と戰

ふ時よ。高市社坐事代主神。牟狹社坐生靈神。高市縣主許

梅小著りて。御教有し。後小村屋神著祝曰。今自吾社中道

軍衆將至。故宜塞社中道。故未經幾日。廬井造鯨軍自中道

至時。人曰。即神所教也。辞是也。軍政既訖。將軍等舉是三神

教言而奏也。即勅登進三神也。品以祠焉。と何るは。即是神

也。登進三神也。品以祠焉。と何る事。由ち第一段の傳は

て式ある丹波国桑田郡小出雲神社。駿河国廬原郡小御
穗神社外どあるを也。或説どもよ。此比賣神ありと云る
は非あり。出雲神社ハ大國主神あること、第百廿三段の
神天皇、卷小委く。御穗神社ハ吉備建彦命あることを崇
注ふを見べし。○配汝爲妻ハ延喜古本ハ伊麻志邇阿
波世牟賣登世與と訓るよ従ふはし。常の本ハ汝邇配
多れど意。けて今かく御女を配せて。御妻と爲し給牙
達あり。若疎ふる御心の出来あむ事。所思坐て此御
舉のみあらば此比賣神ま然はき物識よ。大物主神
ハ八百万神ま萬物此靈を治給ふ後の政を知た
給ふべき性ありし故ぞ有はき。志理倍乃政と云こと
ハ第一段産靈神の下

よ注るを。そは後よ崇神天皇此御世了。大物主神倭迹
見べし。日百襲姫命の未然此事をさすよ。能識也給ふはりの
物知あるよ御合坐て妻と爲給牙る事を思ひ合はは
し。○領八百萬神而云く。此勅命を熟思ふるも大物主と
申出御名ハ是時小高皇産靈神の賜牙る外らむと言は
志師考の動まじくおそ所思れ。そはハ百万神を云ふ此
といふ如き意を。○永爲皇美麻命云く。永を登古志閉邇
と訓み爲ハ美多米邇と訓はし。續紀の宣命ハ奉爲と書
と也。漢籍よも此さま
小用牙る事あり

○鏡胤云。こまは二十四の卷を板本と爲て。普く世よ弘

免むとほる者は。近江、因甲賀郡信樂の地小世々住免る。
 藤尾景秀、齋藤長裕。これ二人小こそ。かくて二十一の卷
 よ。これ卷まで。合せて四卷を、第六秩とほ。

彫工 木邨房義

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目 塾藏版

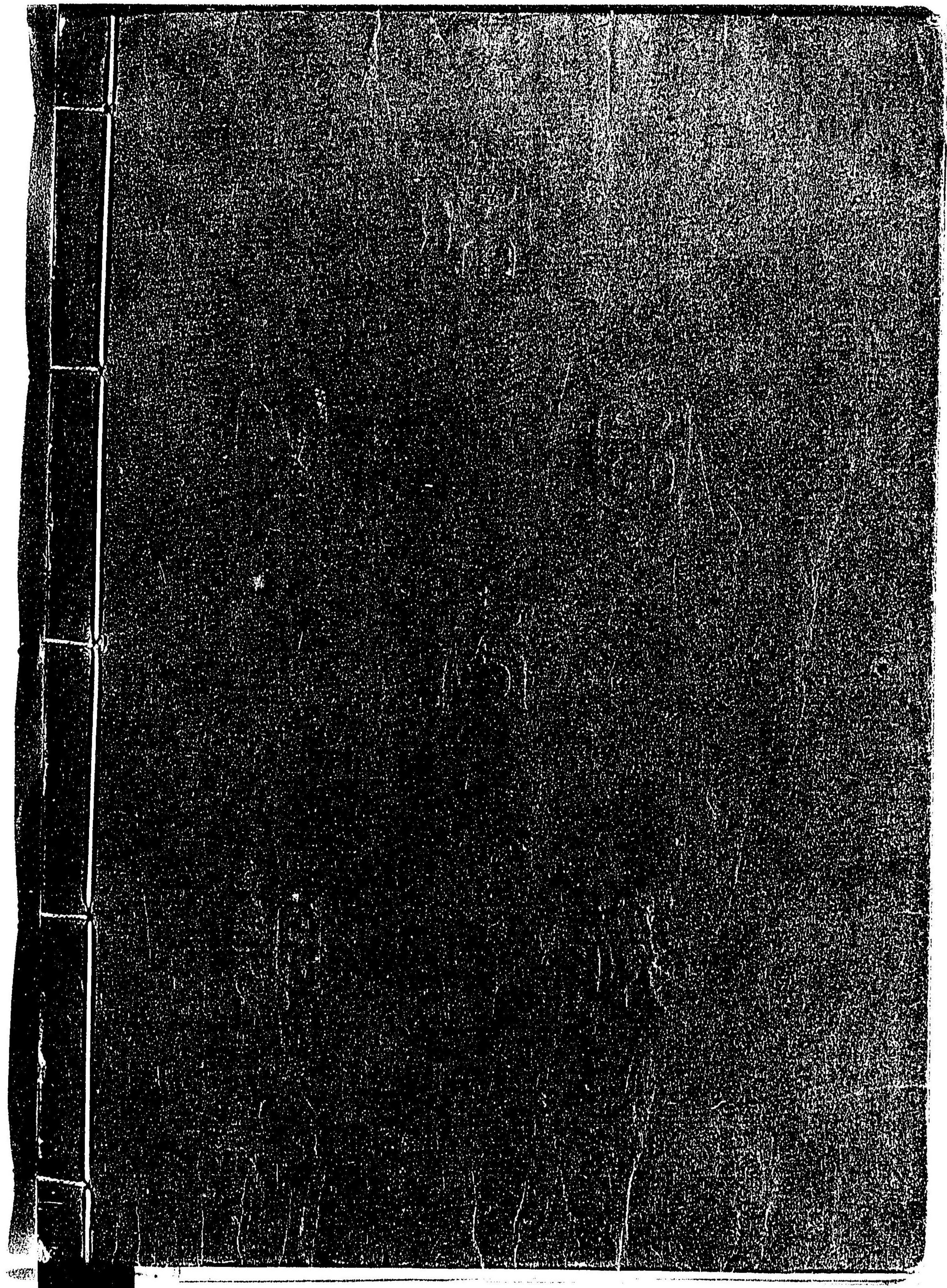
○古史成文 <small>神代部</small>	三卷	○古史徵 <small>神代部六冊 開題記五冊</small>	十一卷
○古史傳 <small>自初卷至 廿八卷</small>	七秩刻成	○古史本辭經 <small>五十音 義訣</small>	四卷
○神代系圖 <small>折本 箱入</small>	一帖	○同 <small>掛軸料</small>	一枚
○靈能眞柱	二卷	○神拜詞記 <small>折本</small>	一帖
○太元圖說 <small>石指</small>	一幅	○古語拾遺校訂	一卷
○祝詞式正訓	二卷	○神字日文傳 <small>疑字 篇附</small>	三卷
○弘仁歷運記考	二卷	○大祓詞正訓 <small>折本</small>	一帖
○天津祝詞考	一卷	○鬼神新論	一卷
○春秋命歷序考	二卷	○入學問答 <small>附著述 書目</small>	一卷
○赤縣太古傳 <small>帙初</small>	三卷	○赤縣太古傳成文	一卷
		○三五本因考	二卷
		○學神号 <small>石指</small>	一幅
		○大杖桑因考	二卷
		○古史年歷編畧	一帖
		○度制考	二卷
		○万聲大統譜	一幅
		○玉多須喜 <small>帙二</small>	十卷
		○同 <small>掛軸料</small>	一枚
		○王多須喜 <small>帙二</small>	十卷
		○古語拾遺校訂	一卷
		○神字日文傳 <small>疑字 篇附</small>	三卷
		○大祓詞正訓 <small>折本</small>	一帖
		○鬼神新論	一卷
		○入學問答 <small>附著述 書目</small>	一卷
		○赤縣太古傳成文	一卷
		○三五本因考	二卷
		○學神号 <small>石指</small>	一幅
		○大杖桑因考	二卷
		○古史年歷編畧	一帖
		○度制考	二卷
		○万聲大統譜	一幅
		○玉多須喜 <small>帙二</small>	十卷
		○同 <small>掛軸料</small>	一枚

○刻成書目

○全

○三神山餘考 一卷	○古今妖魅考 三卷	○古道大意 <small>講本</small> 二卷
○俗神道辨 <small>講本</small> 四卷	○靜乃石屋 <small>同</small> 二卷	○西籍慨論 <small>同</small> 三卷
○出定笑語 <small>講本附錄</small> 凡六卷	○伊吹於呂志 <small>同</small> 二卷	○悟道辨 <small>同</small> 二卷
○牛頭天王曆神辨 一卷	○童蒙入學門 一卷	○三易由來記 二卷
○鑿宗仲景考 一卷	○太界古易成文 一卷	○太界古曆成文 一卷
○大道或問 一卷	○皇典文彙 三卷	○赤縣歷代尺圖 一枚
○古學二千文 <small>讀例付</small> 一卷	○古易大象經正文 一卷	○說文解字序 一卷
○宮比神御傳記 <small>御影付</small> 一卷	○天滿宮御傳記略 二卷	○日女島考 一卷
○古道訓蒙頌 一卷	○神德畧述頌 一卷	○叶古要略 一卷
○荷田翁啓文 一卷	○草木撰種錄 一枚	○魂魄分屬圖說 <small>石指</small> 一幅
○祭典略 <small>祭文例附</small> 一卷	○千字文 一卷	○諸職祖神号 <small>石指</small> 數種
○神字原五十音 一枚	○皇祖宮所考 一卷	○故大人遺訓措物數種

195
24
111



194
34
111

古史傳

三十四